

191
506

1395

真理之本原

第三篇



佛人ドボルワールドレゼー演説

日本林 壽太郎筆記

眞理之本原

第三篇

耶蘇基利斯督の事



眞理の本原第三篇

目次

序言

一頁

第一 耶蘇基利斯督は何故貧賤を以て世に處
ることを望みしや

四頁

第二 豫言を以て耶蘇基利斯督の神なること
を證す

十六頁

第三 誕生を以て耶蘇基利斯督の神なること
を證す

三十頁

第四 奇蹟を以て耶蘇基利斯督の神なること

一

を證す

四十二頁

第五 教訓を以て耶蘇基利斯督の神なること

を證す

五十七頁

第六 死去を以て耶蘇基利斯督の神なること

を證す

六十九頁

第七 復活を以て耶蘇基利斯督の神なること

を證す

七十八頁

第八 耶蘇基利斯督は世界を如何に感化せし

や

九十七頁

眞理の本原第二篇 耶蘇基利斯督の事

佛人 ドルワール、ド、レゼー 演説

日本林 壽 太 郎 筆記

序言

モンテスキューが、天主教は造物主と人間の學問であると、申されました通り、天主教といふ宗教は、造物主と人間に就て、其性質や其働き、及其二者の關係を教へる所の學問であります、故に他の學問と同じく、人智を以て眞理を考へ、眞義に依て研究せねばならぬ、之を以て、本書第一篇及び第二篇に於て論じました、天主教の基礎ともいふべき要點、即ち造物主の在ること、及其性質は絶體無遍にして、始もなく終りも

なく全智全能全善に在り、凡ての學問真理の本原、凡ての力及美の源なりといふこと、又人間は肉體の外靈魂を具へ居ること、其性質は禽獸と全く異なること、及靈魂の不滅、其行末などのことは、主として哲學者は人智に自然曉り得た所の真理を以て説明しました、そうして是等のことは、造物主の啓示に依らずして分ることでもりますから、毎度いふ如く、アリストット、プラトン、ソクラテス、シセロなどの、昔の哲學者は、天主教の説を知らず、又た學びませぬけれども、右のことは能く分つて居りました、故に此十九世紀に當て、世界の諸學校に教ふる所の哲學書に明かに書いてあります、然しながら人智といふものは、如何に深いといふても限りがある、只目前にあることを知る斗じや、現世のことだけは幾分研究が出来る、けれども過去未來に至ては分らぬことが如何程多くあるか分りませぬ、例へて人間は何故生れながら其心が

悪に傾向て居るが、造物主の造りたる世界に何故斯く人間を苦しむるの現象多きか、逆も分らぬ、又有限なる人智には、全智に在りませぬ造物主の命令其聖慮などのことは猶更分らぬことであります、故に造物主の啓示がないならん、人間は眞の道を知ることが出来ないから、廢人となつて仕舞ます、然れども造物主は人間を憐み給ふて、人間に必要なことは啓示下さつた、其は舊新兩約全書に書いてあります、そうして此書は確かに造物主の啓示を記したる聖書じやといふことは、證據を擧げて第二篇に申述べました、其他又此聖書に依て、元祖なるアダム、エワ、の罪の爲に世界が天罰を蒙り、一切人間は惡に傾き、病難苦死などを受くべきものになつたといふことも説きました、之より申述することは、救世主なる耶穌基督のことでもります、是も矢張人智の研究に及ぬことですから、造物主の啓示なる聖書に依て説明すの外も

せぬ、故に先づ聖書は造物主の道なりといふことを、豫め御承知置きなされるが肝要で
らる。

第一 耶蘇基利斯督は何故貧賤を以て世よ處ることを望み

しや

本書第二篇に委しく論じたる通り、人間といふものは皆生れながら元祖の罪に漬れて
居るから、至善なる造物主に勘當されて仕舞たものでゐる、故に造物主の宥しを蒙ら
なければ、現世は勿論來世までも終りなき廢人となつて仕舞ひます、雖然人間の力で
は、其漬れを滌ひ其罪の償を爲し、造物主の宥しを受けるといふことは、逆も出來ませ
ぬ、是非とも漬れなき御者で、造物主の聖慮に適ふたれ方が媒介者となつて、人間を

れ助けなされなければ吾儕は救はるゝことはできないものでゐる、然るに幸ひにして
其貴き難有媒介者が一人ありました、此れ方は今明治三十年を去ること一千八百九十
七年前十二月二十四日の夜半に、猶太國のベトレエムといふ町而かも廐の中に御降誕
せられました、此れ方の御名を漢字に耶蘇と書きます、耶蘇といへを日本人の鼓膜に
は惡魔といふが如く響くでゐりませう、けれども西洋ではイエズ、キリストと申しま
して、其語の意味は一切人間の御助手即救世主といふことでゐる、歐羅巴亞米利加諸
國に於てはイエズ、キリストは、其語の意味の如く確く信じ何よりも難有思ふて居り
ます、然るに日本に於ては耶蘇といへを、其名を聞いて之を嫌ひ之を惡むことは蛇蝎
よりも甚しいといふは、抑も何の理由でゐりませうか、是れ蓋し耶蘇基利斯督は、貧
賤に暮し、終に厭ふべき磔に處せられて御死去なされたといふを以てありませう、

實に耶蘇基利斯督の如く、貧賤にして此上なき難義耻辱を受けられた方はありますまい、是は果して何の爲めでありまするか、何いふ譯でうりませうか、是より其所以を説明ませふ、然しながら先づ諸君に一言御注意申置たい事は、天主教には微少も虚飾話や方便の説はわりませぬから、本心を以て正直にれ考へなさるが必要じやといふこととで、己を欺くやふな不正直なものは、縦い如何なる議論を聴きましても逆も分ることは出来ませぬ、ソコで本心に依て見ますると、人間といふものは、原罪の漬れの爲めに如何に正直なものでも、其心の底を調べて見れを三つの悪しき慾があります、一は傲慢といふ、即ち己を貴び人を卑しむといふこと、二は貪慾といふ、即ち金銭を何よりも大切に思ひ貪ること、三は淫慾といふ、即ち淫れなどを望むこと、此三つの私慾は人間に生れながら有て度々強く起り、如何に其慾に克つことの出來難いか

は、諸君御自分の心情にれ問ひなされをれ分りてうりませう、故に昔より何れの國でも、人間が善を行ふの難きは險坂を攀ぢ登るに例へ、惡を爲すの易きは水の下きに流るゝに比べます、又昔より諸先生方が云ふ如く、人が其私慾を抑へること即ち全く己れに克つといふことは、逆も人間の力に及びませぬ、淫慾を抑へれを傲慢に負け、傲慢を抑へれを貪慾に負けるといふやふに、一つを抑へれを隨て他の一が起る、吾儕の心情は如斯く全く私慾邪情に蔽はれて居りまする、故に耶蘇基利斯督は、一には元祖の罪を贖ひ吾儕人間の漬れを滌ふ爲め、二には吾儕人間の鑑となつて其私慾を抑へ惡しき心を矯め直させる爲に、御降誕なされたので、手近く申さる藥が病を癒す爲にあるが如く、耶蘇基利斯督は靈魂の病を直す爲めに御降誕なされたので、ソウして病を癒す藥といふものは其病に反對する藥でなければならぬ、例へて火傷は水

を以て冷すが如く、靈魂の痼疾なる傲慢、貪慾、淫慾、淫慾を直す所の藥は是等の私慾に反對なる善行を以てしなければならず、即ち傲慢に反對することは謙遜でゐる、貪慾に反對することは財貨を輕んずるといふことでゐる、淫慾に反對することは肉體の難義辛苦でゐる、故に耶蘇キリストは人間を助けたいといふ憐み深き思召に依て、人間の私慾に反對なることを言を以てのみならず行を以て示し成されました、即ち厥の如き汚穢中に其産聲を擧げさせられ、三十歳に至るまでは木匠の職をなされ、極めて貧しく御暮しなされ、御齡三十に達するや猶太國を歴巡つて傲慢、貪慾、淫慾に就て嚴しく訓戒ました、所が良薬口に苦く忠言耳に逆ふといふ諺の通り、猶太國當時の長老教師などの傲慢なる輕薄なる偽善なる人々に太く惡まれ嫌はれて終に彼等の手に磔に處せられ御死去なされました、是が歐米各國人の貴ぶ所難有思ふ所で却て日

本に於て嫌惡どころでゐる、然しながら若し耶蘇キリストをして長者の如く有福に暮し、或は功名手柄して位は帝王の高さに昇り富は四海を保つといふ榮花の身であらしめたなら如何でゐる、諸君は随分感心するでゐりませう、又之を羨むでゐりませう、けれども元祖の罪を贖ひ人性の瀆れを滌ひ吾儕の私慾を抑へ惡心を直し死後の助りを得させるといふ爲めには何の益もありませぬ、諸君は陶朱猗頓の豊裕なることを聽て難有思ひませうか、アレキサンドル、ナポレオンの功績を讀むで辱なく思ひませうか、唯感心するのみでゐりませう、是れ皆な吾儕の爲には何の益も功もなからでゐる、却て耶蘇キリストが様々の難義苦勞を成され色々苛責耻辱をお凌ぎなされ磔にまで架けられなされたのは、皆な吾儕人間の爲である、之に依て吾儕は今世に於ては私慾を抑へるの使りと成り、來世には終りなき助かりを得らるのですから、是は實に何よ

りも難有思ふべき事ではらんか、且又た能々考へれを人間の心ほど淺ましい穢ないものはありませぬ、昔しは支那戰國の世に、彼の蘇秦が志を得ずして其家に歸つた時は其嫂は輕蔑して機屋を下りず其妻は飯をも炊かなかつた、けれども後出世して六國の相印を帯び歸つたときには先きとは打て變つて其妻さへも抑ぎ視なかつたといふ話がふります、是が人情の常でゐる、人が貧乏なれを之を卑しむ、金持なれを之を貴ぶといふ、其心の底を調べれを決して其人を敬ひ貴ぶのでなく、其人の有つ所の財産を崇ぶのでゐる、故に一朝不幸にして財産を無くすか位を失へを、忽ち道路の人の如く振向ひて見るものもありませぬ、シテ見ますると耶蘇基利斯督の如く生涯貧究にして位もなく身分もなく又何の戦功もなく、只耻辱と難義のみを受けて磔にまで架けられたといふやうなれ方で、昔より多くの人々に貴むれ敬はれ現に今日世界人類の三分

の一の人々に救世主と仰がれまするのは、是が眞の敬ひ貴びでゐりませう。
 尙又天主教を立てた耶蘇基利斯督と、他宗教の開祖とを比べて御覽なさい、一切人間を救はんが爲めに其生命までも御捨てなされた開祖は耶蘇基利斯督を除くの外一人もありません、又多くの開祖の中には行正しき人もありましたなれども、生れるから死に至るまで一舉手一投足皆な善行にして吾儕の守るべき規矩となり、吾儕の手本鑑となるといふやうなものも耶蘇基利斯督を除くの外一人もありません、故に吾儕信徒は居常に目を耶蘇基利斯督に着けて其行を考へますから、吾儕は大に力を得て心強く思ひます、例へて現世に於て最も凌ぎにくい難義は貧窮でゐる、俚言にも四百四病の中に貧はと辛ひものはないといふ通りでゐる、妻は病の床に臥し兒は餓に泣くといふ憐れなる境界にあるものは、他教に於ては何を考へて其難義を凌ぎませうか、何を考へ

て其悲みを慰めませうか、實に彼等の心を慰め彼等の心に力を與へるものは一つもムりませぬ、然れども天主教の信徒は斯様な肉體の難義あるときは、吾主耶穌基督が吾儕の爲に吾儕よりも貧しく、吾儕よりも難義を被せられたといふことを考へる故に吾儕も御主に對して現世の難義は何處までも凌がぬをならぬと考へます、是は大なる力を與へるものではありませぬか、大なる慰めではありませぬか、又御主耶穌基督は、吾儕に訓ふるに現世に於て貧しきものは福なり來世に富を得べけれとなり、現世に於て難義苦辛あるものは福なり來世に大なる快樂あるべけれとなり、といふ御金言を以てせられました、吾儕に大なる難義や大なる悲みがあるときは、忽ち右の御金言は吾儕を慰め吾儕に大なる力を與へます、格別吾儕信徒は死期に及んで何の懼れもなく何の案じもなく却て大なる悦びと大なる望を以て居ります、何故なれば

生前に犯した如何なる重罪も、人間の爲めに磔に架けられた耶穌基督の御心配に依て、其罪は赦されたと信じて居るからで、歐羅巴亞米利加の各國人が所謂耶穌を難有く思ふは實に之が爲めで、ソウして此耶穌の難有所が丁度諸君の嫌ひ惡む所で、吾儕は耶穌が底に生れなされる程貧乏じやから難有、耶穌が長老や教師等に卑しまれ嫌はれたから難有、耶穌が人間の爲に最も恥かしい罰、磔に架けられたから難有ので、若し之に反して、位高く金持で一生淫榮榮華に暮したならぬ、何の難有ことも感心なこともありません、故に諸君の輕蔑する所は、丁度吾儕の感心する所、諸君の嫌ひ惡む所は、丁度吾儕の此上なく難有思ふ所で、サテ如斯耶穌基督を此上なく難有思ふものは、歐羅巴や亞米利加の下等な人民斗りでせうか、無智文盲なる翁さん婆さん斗りでせうか、左様思ふ人は豆のやうな小さな

目で日本斗りを視て居るからで、廣く世界を視ましたなら、昔も今も高名なる學者大なる發明家が皆な耶蘇基利斯督を救世主と仰ぎ、敬ひ貴むで居つたことが分るで、今一人二人を挙げますれを、地球が自轉すること及び太陽の回りを公轉することが始めて分つた理學者コペルニツク、ガリレを始め、亞米利加を發見したコロンブス、又蒸氣の機關を發明したバベン、近年に至りましては電氣燈や電話機を發明した合衆國人エザンソン、などの如く、深く學問に達したる人々よりシヤルレーマーギエ、ナポレオンの如き英雄豪傑に至るまで、皆悉く日本人に嫌はれ惡まるゝ所の、耶蘇を貴び敬ひ又た之を難有と信仰した人々であります、是等の學者英雄が、何の理由もなく無茶苦茶に難有と盲信するやうな、不權衡な話は決して無い筈である、何か深い所以が無ければならぬと考へるは當然では、ナポレオン一世が絶海の孤島

聖ヘレナに流されたとき、耶蘇基利斯督に就て何と云ひましたか、吾れは歐洲諸國に勝ち、其功名は世の終に至るまで傳はるべし、されど今は遠流の身なるを以て吾を愛し、吾朋友たるもの一人もなし、吾功名を聞て感心するものはあるべし、されど吾の爲に生命をも抛たんと思ふものは一人もあらず、基利斯督は國王にもあらず、軍勢もなく戦功もなし、彼は只磔といふ耻かしき死様をなしたり、されど千八百年の昔より今日に至るまで、彼を信じ彼を貴び、彼の爲には喜んで其生命をも捨つるもの何萬人あるやを知らず、是れ如何なる功績如何なる勝利よりも感ずべき事ならずや、蓋し是れ人力の企て及ぶ所にあらず、之を以て見れを基利斯督は只人間なるのみならず、造物主の現世に天降りたるものなること決して疑ひなし、之をしも疑はば盲目に異ならず、と曰ひました諸君よ、ナポレオンは無智な人でしたか、無學な人でしたか、是は申す

までもふりませぬ、如斯學者智者英雄豪傑皆悉く耶蘇基利斯督を深く信ずるには、必ず其丈けの理由がなければならぬ、諸君が正直な心を以て天主教をお調べなされ、何うでも其理由を會得することが出来て、今迄嫌ひ惡むだ心は翻て、却て難有思ひ貴び敬ふやうになるのでありませう、故に是よりして耶蘇基利斯督は、只人間なるのみならず一切人類を救はんが爲めに、此世に御降誕せられた造物主で、眞の救世主じやといふ證據を擧げて話し致しませう。

第二 豫言を以て耶蘇基利斯督の神なることを證す

社會學者モンテスキューの著した萬法精理といふ書に、凡そ人間は事物の皮相に引かれて、修飾あるものを喜び、却て修飾なきものを嫌ふと、書いてありまするが、是は

人情を能く穿つた語で、今日日本人が耶蘇基利斯督を嫌ひ惡むといふも、矢張此人情に基くので、畢竟耶蘇基利斯督の皮相の事實即ち其大なる難義や耻辱を受けたことと斗りを視て、其事實の真相を極めず其難有所以を知らないから、漫りに之を輕じ嫌ふて居るのであります、又舊約聖書に、全智なる神の聖慮は無智なる人間の考へとは反對して居ると書いてありまする通り、凡て人間の目から貴いと視へるものは、神の目には却て賤いもの、人間に取りて賤いと思ふことは、神に取りて却て貴いことである、故に耶蘇基利斯督の生涯を、表面から視ますると、彼は既の中に生れ、三十三歳にて御死去なされるに至るまで、貧窮の生活を爲し、時の長老、教師貴人官吏などに甚く嫌はれ惡まれて、磔にまで架けられたといふことは、卑しむべく輕んずべきものやうに思はれませう、然れども歐米各國の開化なる人民が、耶蘇基利斯督を此上なく難

有と信じ、救世主と仰ぎ神として度で拜むといふには、何か其理由が無ければならぬ事であるといふことを考へねむなりませぬ、私は是より耶蘇基利斯督の此上なく難有といふ所以、救世主なる所以、眞の神なる所以に就て、證據を擧げて追々申上る積りですが、先づ前申上げたところのれ考へを以て聴き取り下さらなければ決して分りになりませぬ。

ソコで耶蘇基利斯督が何の爲に世界にお生れなされたかといふに、人間の元祖アダム、エワの二人が神に造られて後、間もなく傲慢心に引かされて、神の命に背いた、其罪は子孫なる吾儕人類に傳はり、爲めに人間は現世來世共に難義不幸を受くるやうになつた、此罪の宥を蒙らせんが爲に現世に天降て、人間の身代となり磔に架られ生命を捨て、人間の罪を贖ふて下さつたのであるといふことは、前に委しく話致しました

が、其天降りなされた方は誰れでありますか即ち造物主でゐる、故に耶蘇基利斯督は、吾儕と同じく靈魂も肉躰も具へて居る眞の人間で又眞の神様である、原罪に漬れた一切人間を救ひ給はんが爲に人間の形を籍りて世界に天降つた造物主で、人の性神の性を併せ具へさせ給ふ御方であるといふことは、吾儕天主教信者の堅く信じて居る所であります、ソウして斯様な驚くべき話を信仰するには、最も確かな證據が無ければならぬ、且又無智無學の人までも救ふ爲に天降つた神ですから、無智無學の人にも信仰することが出来るやうに、最も分り易い最も明かな證據がなければならぬ、然らば其證據は何であるか、先づ第一は豫言であります、豫言とは未來の事を豫め言ふといふの義である、然れども彼の天文學者が、何年何日に日蝕或は月蝕があると曆に記すの類ではない、是等は日月星辰の運轉する規則が確然と極つて居りますから、

未來の事といふても先きに言ひ表はすことが出来る、豫言とは之と違ふて、規則の定まらざるごと人智に知る能はざることを、其未だ來らざる前に豫め言ひ表はすのである、例へて今より五十年百年の後には、日本國は斯様になる、何年後には何國と戦争が起るといふの類で云ります、其も斯くあるべし斯うだらうと云ふでなく、明かに其出來事を見たるごとくいふのであります、ソウして五十年若くは百年後に、確かに之と符節を合せたる如くの出來事が有つたならん之は眞の豫言で云ります、如斯眞の豫言をするといふことは人智に及ぶ所ではありませぬ、尤も千に一か萬に一ならん偶然の中このもありませうが、十が十百が百其豫言が成就したならん、何しても之は神でなければ分ることでないであります、故に若し昔に於て眞の豫言をする人われ心、其人は必ず造物主の啓示を受けて言ふたのであること、疑ひありませぬ、ソコデ

第二篇に陳べたる如く、我信する天主教の聖書即ちビブリアといふ經典は、舊新兩約の二つに分け、舊約は耶穌キリストの降世前、新約は降世後に書いたものであります、ソウして此舊約には地球の成立のこと、人間の始めのことなど學問的の話があります、之よりも最も驚くべきこと感心なことは、舊約の記者等が千年若くは千五百年後の事を微少も間違なく書いた豫言で云る、之は他國の歴史年代記など續いで見て全く其書いた通りであつた事が分ります、其等豫言の中に救世主耶穌キリストに就てのこと最も多くあります、正直に申せし耶穌キリストの事を豫言する爲め斗りに舊約全書を書いたので、其中に救世主に關係せぬ他の豫言の交へあるは救世主に關はる豫言の偽りでないことを證據せんが爲めにあるので云ります、今茲は耶穌キリストに就ての豫言を申し上げませうが、皆な委しくれた話は出來ませぬから其中一二を略して申上ませ

す、先づ耶蘇基利斯督は何國何といふ町に生れるか、何年後生れるか、誰れの血統であるか、如何なる苦難を受け、如何様にして死するか、又死后如何なることあるかなどの事は、舊約全書の中に基利斯督御降生前五百年或は千年千五百年の昔に於て、猶太國の豫言者等が委しく書いたことであります、即ちミケアス、ダヴィド、シエレミアス、イザイヤス、などの豫言者の書いたのを見ますと、救世主なる耶蘇基利斯督は猶太國ペトレエムといふ小さな町に於て、ダヴィドといふ王の子孫なる處女より生れるといふこと、又た極く貧乏なるものより生れるといふても其誕生の時には三人の王が東の方からペトレエム町に来て厩の中にお生れなされた賤い貧いれ方を眞の神と信じ寶物を献じて拜禮するといふこと、及其寶物は黄金と乳香と没薬なりといふ微細なところまでも書いてあります、其中にも最も微細に記しましたのは、耶蘇基利斯督の御苦難御

死去の事で、之は後世に至つて作したではないかと疑はれるほど委しくあります、即ち偽善なる輕薄なる教師等に嫌はれ僅か銀三十枚の金で、彼等の手に賣られ種々の恥辱と苦みを受け、終に盗人と共に磔に架けられるといふことまで、千年余の前に豫言したことであるが、少しでも違ふたことなく其通りに成就致しました、之は新約全書のみならず猶太國及羅馬國の歴史を讀むだならむ明かであります、又たダヴィドといふ豫言者は、耶蘇基利斯督の死后の事を記して磔に處せられて後三日目に復活して昇天するといはれましたが、其通り三日目に復活してオリベットといふ山の頂上に於て衆多の弟子等の眼前に天に昇りました、又ダニエルは耶蘇基利斯督の磔刑に處せられた所のゼルザレムといふ都に就て、何年後に天爵を以て滅亡さるべしといふことを豫言致しました、此ダニエルは耶蘇基利斯督より六百年前の人であります、其頃猶太の民

はペルシアの民と闘ひ敗れてバビロンといふ地へ追はれました、其時に右のダニエルが豫言して猶太の民がペルシアと和睦して歸國するより四百四十年目に當りて救世主は人の手に殺さるべし、又其歸國の時より四百九十年目に當りてゼルザレムは滅亡さるべしと曰ひました、然るに新約聖書のみならず西洋諸國の諸學校に用ふる所の猶太及羅馬の歴史を見ますれを、實に其豫言の如く果して其記した年にキリストは人手に賣されて殺され、其より五十年后即ち歸國より四百九十年目に猶太と羅馬と戦争が起りゼルザレムは羅馬の兵の爲に燹かれて仕舞ました。

楮右申上げた耶蘇キリストに就て、今より二三千年前から記されました種々の豫言を以て考へなさい、未だ天主教を知らないところの日本人は耶蘇キリストに就て飛んだ間違ふた考へをして居る、即ち救世主なるキリストが世界に降誕なさるのには何の

前表もなく何の知らせもなく突然降誕したものゝやうに思つて居ります、近く曰を耶蘇キリストが世に生れ眞の道を人に傳へ悪人の手に磔刑に架けられたるなどのことは總て皆な偶然の出来事であるを後世種々道理を着け之を拜ひやうになつたのであると、斯様に考へなさるでせう、けれども其は世界の歴史を知らぬ人の間違ふた考へで、前に申す如く耶蘇キリストに就ての豫言は、其降生前五百年或は千年或は千五百年の昔より委しく舊約全書に記されてあります、此舊約全書は世界中一番古く出来たもので、其時代の猶太人は其書中の事實を能く知て居りました、ソウして猶太人は商業に就ては中々進むで居りましたから、商業の爲めに其本國を離れて所々方々へ出ました、故に舊約書中に記されたる救世主の豫言は其から其へ言ひ傳へられました、近國は申すに及むず西は羅馬佛蘭西東は印度邊までも其評判が遷りました、如此

顯著なる事實でありますから、耶蘇基利斯督御降生間近の年限に當りますると、各國の人民が凡庸人よりも變つた人がある毎に之が即ち救世主ならんと云ふて評判を致した位でゐる、其他又た世界各国には舊約の豫言が傳つたのか或は先祖より漸々言ひ傳へたのか其は判然しませぬが、兎に角曖昧ながらも救世主降生の説が在つたことは疑ひありません、例へて佛國に於て今を去る六十七年前シャルモンといふ町の近傍に井を掘りました、其時に昔の宮の如き建物を見出した、之は基利斯督降生前佛國に行はれましたドルイディズムといふ邪教の宮である、然るに其宮の門の上に石の額があつて之に夫なくして子を産むべき處女の宮と彫刻てありました、之は疑ひなく基利斯督の御母なる聖瑪理亞を指すのである、して見ると昔の佛蘭西人は父なくして有名な人が生れるだらうといふことを信じた證據でゐる、又印度に於ては昔より行る、

アマ教の説にブラマは、人間の敵なる蛇に勝つ爲に肉を籍りて天降るべしといひます、此蛇が人間の敵じやといふ説は原罪説に該當て居り、ブラマが人間になりて天降るといふは耶蘇基利斯督降生と全く符合して居る説でゐる、尙又妙なことは西洋各國の昔の言ひ傳へには、大聖人が東より來るといひ、ヘルシアの如きは南方より來るといひ、支那の孔子は聖人あり西方よりすと曰はれた、斯やうに國に依て聖人の來るといふ方角が違ひます、之に依て見ましても猶太國近邊に大聖人が生れると知つて居つたことは疑ひないことであります、右申上る如く世界中何か基利斯督降生の豫言に似寄の傳があつたを見れば、人々は救世主とか或は大聖人が生れることを知つて居つた様子であります、されを猶太國の如く舊約全書を以て委しき豫言を告られた人民は、耶蘇基利斯督の降生を待つたことは恰も大早に雲霓を望むが如きでありました、故に

キリストが猶太國を巡回して單に言語のみを以て痲疾を癒し死人を蘇生するなどの人
 力に及むことをなされたから、凡庸の人間でなく約束の救世主なることを信じ
 て之に従ふものは忽ち多くありました、殊に其口づから教訓なさることを聴きたいと
 思ふて大勢の人々が陸續キリストの御跡を慕ふて行きました、斯如猶太國に於て忽
 ちに救世主と信じられたのは、皆な是れ豫言があつたからでゐる、故に今の日本人の如く
 救世主の話に就て驚きもせず怪みも志なかつたのです、又猶太國の外に於てキリス
 トの教即ち我天主教の夙に廣まつたといふも、矢張此豫言の爲めであります、即ち其
 豫言が一分一厘の違ひなく全く成就したから、キリストは通常人と違ひ造物主が其御
 憐れを以て人間を助ける爲に態々天降つて人の罪を贖ふ爲に難義耻辱を受け生命まで
 も捨て、吾々の代りに磔に架けられた眞の救世主であると信じ天主教に入つたので
 す、されど昔キリストの御弟子等が四方に別れて天主教を弘布た時代は今と違ふて多
 數の人々は救世主の話を聴きましても、素より知つて居ることですから別段に驚きも
 せず不審にも思はず大に信仰し易かつたのです、却て今日に於て日本の如きは、豫言
 に就いて何の傳へもなく全然初耳じやから、救世主の話を聴きますと種々様々の疑ひ
 を起しなされるでゐりませう、けれども右お聴きの通り豫言といふことは疑ひないこと
 でキリストが人間に生れなされた造物主であるといふ明かな證據でありますから、
 之を以て考へなされたなら西洋の如く文明の國々でキリストを拜むといふ理由が
 少しはね分りだらうかと思ふ、尙ほ此他にもキリストの神なること眞の救世主なるこ
 どの證據は澤山ありますから是より追々申上げませう。

第三 御誕生を以て耶蘇基利督の神なることを證す

世界は廣く宗教は多いといふても、吾々人間の踏み行くべき眞の道は我天主教を除くの外一つも無いと私は確く信じて疑ひませぬ、故に天主教を信じて之を奉ずるものは死后人間の往くべき所に達することが出来、天主教を奉せぬものは人間の道を踏み迷ふた人ですから死后全善なる造物主に見放され飛んだ所へ往かねむならぬと私は飽く迄も論じます、其は何故でありませうか、天主教は眞の神様なる耶蘇基利督が親かられ教へなされたる宗教であるからであります、そこで耶蘇基利督の神なることは既に豫言を以て證據致しましたが、今度はずつと論歩を進めまして耶蘇基利督御生涯の事を歴史上から觀察て其神なることを證據するのであります、然しながら豫め一言れ断り申置く事が一つある、其は外でもない耶蘇基利督の歴史を述べるといひ

ましても天主教の聖書なる舊新兩約全書のみを以て話したならん、諸君は必ず疑ひなさるでうりませう、なれども私の申上げるのは決して聖書のみにあることで他の書に少しも記して無いといふやうなことではない、耶蘇基利督といふ御方は、未だ此世界に生れなされぬ前から豫言に依て其御誕生を待ちつゝありたるのみならず、猶太國の外なる國々で異人物を視る毎に是が救世主ならんと言き立てるほど顯著な方でありますから、其御一生の事は聖書の外の歴史年代記などにも載せてあります、故に是を調べたならん明かに分ることです、殊には耶蘇基利督が猶太國ベトレエム府に於て厩の中に御誕生なされたといふこと、三十歳に至つて猶太國中を歴巡て大勢の人々に向つて御教訓なされたといふこと、最後に磔柱に釘殺られ給ふたといふことなどは、決して秘密ごとでなく最も公然のことで、假しや隠蔽たいといふても逆も

隠蔽されぬことであります、又其御死去の時などには大なる不思議があつた、即ち其時は晝の十二時でありましたのに、俄かに世界が暗く夜の如くになり、大なる地震があつて礫に架けられた處のカルワリオといふ山の頂上が二つに割れて大なる龜裂が出来た、斯やうな天變地異がありましたから基督の評判は中々高かつたのです、故に天主教の聖書でなくとも、外教の歴史家の書籍中に基督の話は澤山ある、其等歴史家の中最も名高い人はジョゼフといふ、此人は基督御死去の時に當て生れました人ですから極めて委しく知つて居りました、次に又右等歴史家の著書よりも尙ほ確かな證據といふは、例へて日本に於ても大名公卿等の家に代々傳つたる古文書とか、若くは舊家の文庫などに藏めてある書類或は官衙にある簿刑などいふものが古代歴史の引證となるが如く、彼方にも矢張り斯やうな色々の書類がある、是等を取調べましても基督

の御誕生御死去の次第柄が明かに知れます、さて如斯種々の證據が多くありまするから、基督の歴史は何うでも之を信じねむならぬ、若し之を信じねむならぬ矢張り太閤秀吉アレキサンドルの功名話も信する譯はふらぬ、然るに諸君は日本歴史の神武天皇が東國を征伐し給ふた事實を真としながら、獨り他國の歴史而かも立派な證據あることを信せぬといふは、甚だ不公平極まることじや勝手至極と申さんければならぬソコで天主教の難有理由を曉るには、先づ基督の歴史を知らねむならぬ、之を知つたならん今迄耶穌といふて日本國に大に嫌ふた又大に疑ふたことの謬なることが自然に了解て來ます、諸君の所謂耶穌に就て最も驚きなさることは、眞の神なる基督が既の中に誕生せられたといふ事であります、成程無遍なる造物主が既の如き汚穢場所に誕生おらせ給ふたは甚だ謂れ無いやうに思れます、けれども是には深き理由のあ

ることじや、是は決して偶然の出来事じやない、造物主の聖慮より出でたることでありませう、造物主は九重雲深きと金殿玉樓の中に誕生せられたることは何の作造もないことじや、然し之は造物主のね目的に適はぬことである、救世主なる基督が此世にお生れなさるは榮耀榮華を人に示しなさる爲めでなく、却て貧窮艱難をれ示しなさる爲でゐる、即ち人間の貴き手本となり鑑となつて、吾儕の心中に燃へるところの強い私慾の焰を抑へさせるが爲めでゐる、世の財寶や快樂は墓ないものだといふことを覺悟せる爲めにれ生れなされたのでゐる、茲に先づ御誕生なされた有様を委しく陳べませうに、時は今明治三十年を去る一千八百九十七年前のことである、其頃猶太國は羅馬の屬國でありましたが、當時の羅馬國王セザル、オギユストと申すが天下に戸籍調査を布告ました、所が戸籍を調べるときには人民は皆な其故郷に歸て改めを受けねむならぬといふ規則でありました、故に基督の御母なる聖女マリアは猶太國ナザレットといふ町に住んで居ましたが、本ベトレエム府に生れたものですから御懐胎殊には臨月でゐりましたけれども戸籍の調査を受ける爲にベトレエム府に往つたんです、所が斯やうに八方からベトレエム府に歸へるものは澤山にありましたから町の中に宿泊せき家は最早無かつた、依て止むを得ず町を出で、ある山の麓なる厩の中に一夜をね凌ぎなされやうとした、其日は即ち十二月廿四日の夜であります、然るに五百年千年の前より多くの聖人方が救世主の誕生を豫言された通り、丁度其夜の十二時頃即ち廿五日の午前に聖女マリアは一子を産み給ひました、是が西洋各國に眞の神と信じ拜む所の救世主耶蘇基督でゐります、此時に最も不思議なる事がゐる、即ち猶太國より東方に當てメソポタミアといふ國に三人の王がりました、其はガスパル、バルタザ

らぬといふ規則でありました、故に基督の御母なる聖女マリアは猶太國ナザレットといふ町に住んで居ましたが、本ベトレエム府に生れたものですから御懐胎殊には臨月でゐりましたけれども戸籍の調査を受ける爲にベトレエム府に往つたんです、所が斯やうに八方からベトレエム府に歸へるものは澤山にありましたから町の中に宿泊せき家は最早無かつた、依て止むを得ず町を出で、ある山の麓なる厩の中に一夜をね凌ぎなされやうとした、其日は即ち十二月廿四日の夜であります、然るに五百年千年の前より多くの聖人方が救世主の誕生を豫言された通り、丁度其夜の十二時頃即ち廿五日の午前に聖女マリアは一子を産み給ひました、是が西洋各國に眞の神と信じ拜む所の救世主耶蘇基督でゐります、此時に最も不思議なる事がゐる、即ち猶太國より東方に當てメソポタミアといふ國に三人の王がりました、其はガスパル、バルタザ

ル、メルキオンと申し何れも博學多才のれ方で、別けても天文學に通じて日月星辰の事は能く知つて居りました、或時毎常天に見馴れない星が顯はれたのを見て三人の王は不思議に思ふた、けれども救世主誕生の時に常に視へざる星が空に顯はるべしといふことが昔の豫言者の書即ち舊約聖書に記してあることを思ひ出し、是は必ず救世主の御降誕あるに疑ひなしと信じ、一時も早く之を拜まんと三王ども各駱駝に騎て本國を出で星の方を指して遙々發足して終に猶太國に着させルザレム府に入りました、けれども救世主は國王の宮殿に生れなさるだらうと思ひまして猶太國王ヘロデスの所へ往き、之に向て常に無きところの星を天に見て吾は世界萬國の王たるべき救世主が生れ給ふべき事を知り此處まで來たが救世主は何れに生れなされしかと尋ねました、ヘロデス王は之を聽いて大に驚き直ちにセルザレムに住むで居る教師や學者

等を召集め、汝等は萬國に王たるべき救世主の何れに生れるかを知るやと問ひました、教師や學者等は皆な異口同音に舊約に記されたる豫言に依れん猶太國ベトレエム府であると答へました、ヘロデス王は之を聽いて我國內に吾の外王たるべきものが生るゝならん油々敷大事であるから早く稚子の中に殺さうと思ひました、けれども何れが救世主なるか分りませぬから、ソコデ其惡意を隠蔽まして右の三人の王にベトレエム王府なることを教へ、且つ曰ふに救世主が分つたならん吾も往きて拜したいから知らせるやうにと吳々頼みました、ソコで三人の王はセルザレムを出でベトレエムに向ひました、然るに其町に入らない前或る山の麓なる厩の上に先きに見た奇異星の光りを見、始めて救世主の生れ給ふ所と分り厩の中に入りました、所が此上もなき困究の有様で嬰兒は藁の上に臥し其傍に母なるものゝ居るを見ました、然るに三人の王は之を

見て即坐に拜禮し、此の貧しき嬰兒を造物主の御降誕せられたのであると堅く信じ、其信仰を表はす爲に寶物を三品献じました、即ち黄金と乳香と没薬であります、此三つの献物は實に三人の王の信仰心を表はして居ります、今其意味を考へて見まするに、黄金は御存の如く金屬の中に王でありますから之を献じたのは即ち基督は王中の王たる事を表したのである、乳香とは一種の香でありまして香を焚くといふ事は神を拜禮の禮であります、故に之を献じたのは即ち基督の造物主たる事を表したのである、没薬とは油薬で昔小亞細亞埃及地方に高名の人が死する時は其屍の腐らぬ爲に之を塗つて葬むるといふ習慣でありました、故に之を献じたのは基督は造物主じやといふても此世に御降誕なさるゝには吾儕と同じく肉躰も靈魂も具へたる眞の人間であるといふことを表したのである、之を以て見ますると三人の王は能く明かに救世主の意味

を知つて嬰兒なる基督を拜禮したといふことが分る、其より三人の王は其本國へ歸りましたが、猶太國王ヘロデスが心中に救世主を殺さんといふ惡意を包藏して居ると曉りましたから、故意とセルザレム府に寄らずして他の路を取りてメソポタミアへ歸りました、ヘロデス王は之を聽て大に怒り且つは救世主は後々猶太國王になると考へて懼れて居りましたから、何うでも之を殺したいといふ一心で惡逆な工夫を致し、直に兵隊をベトレエム町に送り、其町中は勿論近在に至るまでの二歳以下の稚兒を悉く捕へて之を殺させました、然れども此殘忍な所置も其効を奏さなかつた即ち基督の御母聖マリヤは神のれ告に依て兵隊が未だベトレエムに來ない中嬰兒なる基督を抱いて隣國埃及へ遁れました以上れ聽の通り耶蘇基督は普通の人と違ふて厩の中にれ生れなされる程貧乏でありましたから之が造物主であるを聽きなされたならを不審に思ふで有りませ

うが、其貧しく生れなされた理由及び貧しく生れても眞の神なること疑ひないといふ證據が分つたならん其れ疑ひは晴れて却て難有思ひなさるでふりませう、即ち眞の神なる基督も厥の如き卑しい所に生れ其御母聖マリアは之を畏れ多くも秣槽の中に寝かし申し僅かに葉を以て十二月の夜寒を凌がせ申した、斯る御難義を凌生れなさるや否やれ凌ぎなさるといふ理由は、實に吾儕の貴き鑑となる爲めで人間が現世に生れ出るは肉軀の快樂を得る爲めじやない、現世は難義苦痛の世で來世に幸を得る爲であるといふことを覺悟せる爲であると知つたならん、如何に頑固なる人でも其難有意味が分るでありませう、又其神なる證據は右に話した處は凡て豫言に應ふて居る、即ち御誕生の時其處及び天に異る星顯はれ東方より三人の王が來て禮拜する、又其獻する寶は何であるといふことまで逐一何千百年の前より豫言した所に應ふて居る故に

眞の救世主眞の神なること疑ひない、其のみならず基督御誕生の事は豫言があつたから大評判の事で其時の人民には能々知れ渡つて居りました、故に決して世間に知れぬやうな隠微たる事柄でなく顯著たる事柄であつた、尙ほ又其のみならず基督の生れなされた處は今にも在る、之は御誕生の遺跡として名高い、毎年十二月二十五日の御誕生節には西洋各國から多くの信者が此遺跡へ參詣する、又た基督が入られて一夜を明し給ふた秣槽は今にも羅馬府なる聖ペトロの御堂に聖き遺物として納められてある、又彼のメソポタミアなる三人の王の遺骨は現に獨逸國コロニユといふ町にある、獨逸國では之を貴んで立派なる堂を建て之を三王の御堂と名けました、是等は今日吾儕の目に觸る明な證據である、又此類の證據は此他にも澤山あります、之を以て西洋各國に於て基督誕生の事跡を疑ふものは一人もふらぬ、天主教を信せざる歴史家まで

も右の話は皆な承知して居ります、故に諸君が日本歴史上御承知なさる秀吉の話信長の話よりも猶は一層確實の話である、以上申し上げました所を以て考へなされたならんを耶蘇基利斯督は眞の神なることは疑ひないではムらんか。

第四 奇蹟を以て耶蘇基利斯督の神なることを證す

耶蘇基利斯督が現世に在らせられましたは僅かに三十三年の間でありまして、其中でも教法を説き遊ばされたのは終り三ヶ年の短日月であります、御齡三十に至るまではナザレットといふ小さな町に其御母なる聖マリアと共に住み極めて卑しき木匠の職を爲され、極めて貧乏に暮しなされて居りました、是は吾儕人間の如き短慮な意を以て見ますると甚だ驚き怪むことで、何故なれを耶蘇基利斯督は前々より毎々申す如く道に迷ふたる人間を救ひなされる爲に人間に生れなされた造物主であります

から、最も必要なるどころの眞の道を立てなるといふことを何世に早くなされず、わざ／＼三十歳まで木匠の職などに就いて居られたのであるか、甚だ其意を得ぬとれ考へでせう、けれども是には深い理由のあることであります、凡そ人間といふものは智識より出づる誤謬は矯め直しやすいが情から出る過誤はなかく矯め直しにくいものであります、故に智識に關係しての誤謬を矯正ため即ち言語を以て人間の道を説き、守るべき規則を教へるなどの爲には三年の間丈で充分であります、なれども情に關係しての過誤を矯正には口を以て教ふる斗りでは逆もダメじや、吾儕人間の如く全く悪に傾いたもの、情を矯めなほすには、何うでも行を以て善なる道を永い間自ら守て吾儕に示しなされねをならぬ、是耶蘇基利斯督が三十年の間何も教訓す、只其御親に孝行し、賤い職業をなされて、人間の情にある私慾、格別悪の原なる傲慢心を

矯め直す爲めに躬行を以て謙遜の徳をれ示しなされたのでムります、ソウして三十歳に成りますと、漸く教を説き始めなされた、けれども其は僅か三年間でありました、シテ見ますると基利斯督は御自身で教を弘める聖慮でなく、其御弟子を以て萬國萬民に其御教を弘めさせやうといふ聖慮に相違ない、故に基利斯督は教を説き始めるに當ては、先づ弟子をね撰みなされ、ソウして彼等と共に猶太國中に三年間巡回し、口づから教を説いたり又神妙なる事を爲さつて御自分の神なることを證據立てなされ、三年目に當て一切人間の罪を償ふが爲めに豫言の如く磔に架けられたのでムります、依て是より基利斯督の神妙なる事といふは何んな事であつたかといふことを申上まする、ソコデ基利斯督がね撰みなさつた弟子は十二人ある、其十二人を如何様にして撰みましたか、之は實に感心な話で、基利斯督は只言葉を以てれ命じなさつた斗りじや

けれども、皆な即座に従つたのです、例へんペトロと其兄アンドレアス及びヨハネと其兄弟ヤコブといふ四人は漁師でありました、或日此四人がシエネザレットといふ湖水の邊に漁りて居りましたとき、基利斯督彼等に吾に従へ今より汝等を人を漁るものとなさんと曰ひました、然るに彼等は直ちに其網を捨て、従ひ往きました、又マテオといふ人は税吏でありましたから貢を斂める爲に役所に居りました、其時基利斯督は前を通り掛りまして、汝は吾後に従ひ來るべしと宣ひました、之を聽いてマテオは直ちに其職を罷め御後に従ひきました、是は實に感心より寧ろ驚くべきことで、然れども能々考れを斯様に人々が懐くといふは當然のことで怪むに足りませぬ、基利斯督は現世に人間とられた造物主ですから、普通の人間とは其容貌から態度に至るまで全然違ひます、殊更其愛と威とを具へ給ふ御目差所謂威あつて猛からざる氣高き風

采は、人が一度見ますると自然に敬ひ慕ふ念が生ずるから、如斯容易く従つたのである、又た基利斯督が十二人の弟子を如何なる人間より撰みなされましたらうか、其撰擇方を考へたならん、明かに神の御力を顯はして居ることが分ります、今總ての他教の開祖とか或は一派の學説を立てた人などが、其教を擴めたいとか或は其説を流行させたいといふには、先づ才智勝れたるものか、有爲活潑なる人か、若しくは身分賤しからざるものといふやうなものを撰擇といふが、己れの教若くは説を擴張の手段とする之が普通の人情で又た人間の爲には道理なことである、然れども至智なる神の聖慮は無智なる人間に反すと、舊約に記せるが如く、基利斯督は眞の神ですから、教法を擴める爲に人間力を頼みと致しませぬ、却て故意と無智無學なるものを撰むで弟子となされた、即ち十二人の中マテオといふ一人丈け税吏でありましたから幾分か

學問もありません、けれども税吏は猶太人には最も蛇蝎視た役人であり、其他の十一人は皆漁師で心は正直でありました、怯懦にして身分もなく勢力もなく財産もなきもの斗りでゐる、如斯儕輩を以て小亞細亞から歐羅巴各國に天主教を擴めさせました、然るに天主教は大なる勢力を以て世界万国までも傳はつたといふは、實に人間力でなく神の力じやと曰はなければならぬ、人間の想像でなく天より出づるの道じやと承知しなければならぬ、又耶蘇基利斯督は御自分の神なることを證據する爲めに、如此無智無學なる弟子を撰みなされたのに疑ひありません、彼のナポレオン一世は、之を考へて大に感じ基利斯督を眞の神と堅く信じたのである、即ち昔より有名な武將が大軍を帥いて成した功績は、今に於て何の益があるか、只歴史に其英名を輝かすといふだけで皆是れ無駄ごとである、然るに基利斯督は卑賤且つ無智無學なる十

二人の弟子を以て其教を傳へさせたのに、世界到る處靡然として彼が教に遵ひ彼が説く所の道を守り、而して彼を神として拜む、彼は是と其成したる蹟を比ぶれを實に天地霄壤の違ひである、之を以て見れを基利斯督は人間のみなならず眞の神たるに相違ない堅く信じたので与ります、然れども斯やうなことは後世のものからは考へられることですが其當時の人間には考へられぬことじや、故に耶蘇基利斯督が三年の間に巡太國內を御巡回なさるゝとき、親しく其氣高き風采を看、奇らしく能辨なる御説教を聽きましても、皆な非凡な人と思ふたには相違与りませぬが、肉躰を籍りて居りますから人々の目からは矢張り人間とのみ視へて、眞の神なることを曉ることは出来なかつた、之を以て眞の神じやといふ證據をれ示しなさる爲めに、人力に及むことをなさつた、是を奇跡と申します、即ち神妙なる業といふことで与る、其神妙なる業即ち

奇跡は何んな事でありましたか、例へて病入或は啞聾盲などの癱疾を癒し、或は死人を蘇生せ、或は又言を以て暴風や怒濤に沈静ことを命じなされたなどのことで与る、斯やうな奇跡は澤山ありますから、今一々之をれ話しすることは出来ませぬから其中二三だけ申上ませう、基利斯督が或る時弟子等と共に小舟に乗つてシエネザレットの湖水を渡りました、所が中程にして大なる颶風たこりて小舟は濤の爲に覆へるをかりでありました、けれども基利斯督は舟に眠つて居ました、弟子等は懼れて醒して曰ふ、主よ我等を救ひたまへ彼等沈没とす、耶蘇彼等に言たまはく、曷ぞ怖るゝや信仰薄き輩よと、頓て起て風と海に命ずれを直に平靜になりました、其時弟子等異みて曰ふに、彼は何人ぞ風も海も彼に従へりと(馬寶傳八章)、又た或時耶蘇利基斯督は弟子及び許多の人々と共にナインと云ふ邑に往きました、邑の門に近づきたる

とき、墓地に送らるゝ死人に遇ひました、其母は發にして死人は其獨子であります、
 邑の見送の人々も多く居ました、耶蘇は發の歎きを憫み、哭なかれと曰ひて近より、
 其概に手を按て、死人に對ひ曰たまはく、少者よ我なんぢに命すれきよと、死たる者
 起きて言ふ、耶蘇は之を其母に予しました、衆人懼れて神を崇めいひけるは、大なる
 豫言者吾等の中に興る、神は我民を憐み給へりと、耶蘇、基利斯督の此聲名は猶太の全國
 また偏く四方近國までも揚りました(路加傳七章)、猶又之よりも大評判したのがあり
 ます、其はラザルといふ人の蘇生でゐる、ラザルといふ人はセルザレムに近いベタニ
 アといふ邑に、宮殿のやうな家に住んで随分立派な身分の人でありました、其妹にマ
 ルタとマグダレナと稱るゝ二人があり、此兄弟三人は至て正直な人等で耶蘇、基利斯督
 を堅く信じて深く基利斯督に愛されて居りました、或時基利斯督が他國に巡回されて

居た、其時彼のラザルは急病で死にました、基利斯督は別に其報知を受けただなくし
 て之を知り、弟子等に告て言たまはく、ラザルは死ねり爲に爾曹は吾を信するやうな
 るを喜ぶ、然れどもいま彼處に往くべしと、其より往きてベタニア町に着き給ひし時
 には、ラザルは墓に葬られて四日目であつた、多くの猶太人は二人の妹を慰める爲に
 セルザレム府から來て居りまして、基利斯督の來たといふことを聞て二人の妹と共に
 出迎へました、二人の妹は基利斯督の足下に伏しいひけるは、主よ若しこゝに在せし
 ならむ我兄弟は死せざりしものと、基利斯督は二人の妹と猶太人の泣くを見て憐む
 で言たまはく、ラザルの葬られたる墓に往けど、墓は洞にて其口に石を置いてありま
 す、基利斯督又言たまはく、石を去よと、死んだ者の妹マルタ曰けるは、主よ彼はは
 や臭し死てより己に四日を経たりと、基利斯督言たまはく、爾若し吾を信せば神の榮

を見るべしと先きに言しに非ずやと、遂に其石を取去たり、基利斯督は大なる聲にて言ひたまはく、ラザルよ出よと、死人は布にて手足を纏れ面は手布にて裏れたるまゝ、聲に應じて出でました、基利斯督言たまはく彼を釋いて行しめよと、之を見た所の猶太人は多く基利斯督を信じました、然れども之を聞いたセルザレムの官吏教師などは、議員を召集して相談して曰ふのに、我等は如何にすべきか基利斯督は多くの奇跡を爲すゆゑ若し此まゝに棄置を人々皆彼を信するやうになるべしと(約翰傳十一章)以上申述ぶる所は皆な新約全書に記してあることですが、此他にも奇跡はまだ澤山あります、けれども始めて聴きなされる方は、ソナ怪談は決して信じられぬ所謂法華信者が日蓮の龍ノ口御難を真と信じ有り難がるの類じやと、頭から打毀すでふりませう、成程學問が開けて來た今日、佛教神道ブラマ教回々教などの小説的怪談は、眞理にも學問にも合はぬ、信するに足らない譚話であるに違ひない、是に就ては一つの面白話がある、御存でふりませうが回々教の開祖マホメットの墓はラメツンといふ地にあります、其墓に一つの不思議があると昔よりいふた、即ちマホメットの遺骸を收めたる棺は、繩を掛けるでもなく釘を打つたでもないのに、天井に固着して居るのです、故に人々は奇跡のやうなものだと思ふて居つたのです、所が近年に至つて漸々之を調べて見れば、其も道理天井には大なる磁石が装置してあり棺の蓋には鐵が入れてあつた、是に依てマホメットの墓の奇跡は磁石作用だと分つた、他教で神妙を説くは皆な此類でふる、けれども天主教でいふ奇跡の話は如何に學問が開けても決して打潰すことの出來ない證據があります、却て學問が開け進むに従て先きに疑はしい事も追々分つて來ます、故に如何に能辨な人でも筆を巧く弄すものでも、耶蘇基利斯督の

歴史に就ては之を虚偽だ作り話だといひ黒めることは出来ないのです、本書第二篇に於ても申上りました通り、今十九世紀に當ては歴史も他の學問と同じくよく開けまして、歴史家は歴史を調べまするにはなかく精密に且つ嚴重な規則を立て、之に依て調べ、又た多くの考證などに照して調べますから、事實の虚か真かは甚だ分り易い、一例を申せむ耶穌キリストの奇跡は許多の猶太人の眼前になされたことですから、證據人は澤山ありまして、獨り新約全書を記したる弟子等斗でないといふこと、又た耶穌キリストの歴史は只新約全書のみならず猶太國羅馬國などの歴史年代記にも記してあるといふこと、是は歴史を調べるに就ての規則即ち一人の手でなく多數の手に記される歴史上の事實は眞なること、一國の歴史のみならず他國の歴史と照合て事實の符合することは偽りならざること、といふに照して疑ひない、又多くの學者先生等が申

す如く、歴史の眞なることを證する中に一番確かとすべきは、己れの生命を捨て、以て證據とするのである、考へて御覽なさい見たこと聞いたことを證明するには言語や筆を以てするは容易い、けれども其爲に血を流し生命を捨て、も其事の眞なるを證據するといふはなかく成し難いことである、故に若し生命を捨て、も其事の偽りならざること證するならば、其證據は最も確かなものとしなければならぬ、然らむ耶穌の弟子は如何であつたか、彼はキリストの眞の神なること、其行ふた奇跡の眞なることを證據する爲めに、其生命をも捨てました、即ち彼等はキリストを捨て、偽りをいふよりも、寧ろ己れの生命を捨てる方がよいと思ふたのです、諸君も御存でせう修身書などに其名の見へる、聖人ペトロ、ポロは、キリストの弟子でありましてキリストのことを證據する爲に羅馬に於て逆磔にせられ、ポロは斬罪に處せられま

した、其他アンドレアスはパトラスといふ町に磔に架けられ、ヨハネは羅馬に於てドミシアンといふ天子に油を盛りたる釜で烹られ、ヤコブはヨエルザレムに於て石を以て擧殺されました耶蘇基利斯督の御弟子等が、皆な如斯殺されたのみならず、其他にも矢張り教の爲めに殺されたる信者は、昔に於て何百萬人といふ程でありました、サテ斯やうに耶蘇基利斯督の御歴史に就ては、生命を捨てるほどの確かな證人が多くありますから、他教の怪談とは飛んだ違ひで比べることも出来ない、又た西洋各國の學者までも基利斯督の奇跡を信ずるのは、此理由だからでゝる、ソウして此奇跡は人間の力に迫り及ぶぬことじやから、是は造物主の御力でなされた業に疑ひない、是耶蘇基利斯督は人間なるのみならず眞の神にして人間を救ふ爲に天降たる眞の神さまで信ずる所以でゝります。

第五 教訓を以て耶蘇基利斯督の神なることを證す

前の演説に於ては、耶蘇基利斯督の行ひなされた奇跡を以て考へて見ると、何うしても人間業でないから眞の神なること疑ひないといふことを申上りましたが、今度は其教訓なされた道は如何なるものであるか全く眞理と道徳に合ふや否や、其多くの教訓なされしことの中には、或は誤謬はありはせんか、或は缺點が有りはせんかといふことを調べて見ませう、ソウして若し其教訓に一點の誤謬があるか缺點があるならん、基利斯督は決して眞の神でない、若し又微小も誤謬や缺點がないならん、ソハ人智より出でたる道にあらずして疑ひなく眞の神より出るの道でゝります、故に之を教訓なされた基利斯督は矢張疑ひなく眞の神なるに相違ひりませぬ、ソコで基利斯督が終り三年の間猶太國中到る所、許多の人々に對て御説教なされたことは、新約全書に少し

く記してありますが、其意味深いことを極めて平易の例を引き、如何に無學な人にも
 曉り得るやうに説きなされたのは、實に感服すべきことで、而して如斯縷々
 教へ下されたところの多くの眞理道德などは、一言以て之を蔽へむ、御一体なる造物
 主と又人を愛すべしといふに歸します、即ち馬竇傳二十二章（自三十五年）に一人の教法
 師、耶蘇を試みて問ひけらく、師よ律法の中何の誠命が大なるや、耶蘇彼に言たまは
 く、汝の心を盡し汝の靈を盡し汝の意を盡して主なる造物主を愛すべし是最も大にし
 て第一の誠命なり、第二も之に同じ他人を我如く愛すべし全の律法皆是二則の誠命に
 基けりと、記してあります、此御金言を以て見ますると、耶蘇基利斯督の御教即ち
 天主教を信仰するもの、守るべき務は、天地人間萬物を造り給ふたる御一体に在す造
 物主と、一切人間を愛せねむならぬといふことで、凡ての律法規則及び務は皆な是よ

り出るもので、畢竟愛の一字に基づくものですから、人間は愛徳に従つて行ひま
 すれを過失もなく罪惡もなく全く聖人君子とされるので、ソコで先づ第一
 の掟なる造物主を愛すべしといふことは、道理に合ふことでありませうか、是は我天
 主教を除く外佛教にも神道にも儒道にも神を愛せよと教ふるものは一もないから、諸
 君は之を聽いて或は驚きなさるか、私に今より十何年前越後の國に於て或老
 年の漢學者に右の話を致しますと、彼漢學者は大に笑ふて、神のやうな眼に見へない
 ものを愛せよとは無理じや不能ことじや、と云ひました、私は之を聽いて大に悲みま
 した、何故なれを彼老人の如き随分學問のある人にして眞理に合ふたる話に分らぬの
 みならず笑ふべき愚説と思ふなれを、是よりも學問もなく智慧淺き人には猶更分らな
 い筈じや、けれども諸君よ能く考へなさい、吾儕人間は誰のれ庇蔭で日々の糧食を

得ますか、誰の力で此地球が太陽の周回に運轉しますか、誰の力で太陽が何年前から一分一厘間違ひなく世界を照し作物が生育ますか、皆是造物主の御力であることは、道理に依ても學問に依ても疑ひないことである、如斯吾儕人間が造物主の御力其御恵みを以て、此世に生活して居るならん、造物主は吾儕の本原にして吾々の親であるから之に對しては孝行を盡さねばならぬといふ道理である、ソウして孝行とは親の恩を難有思ふて之を愛するといふことでゐる、故に人間は造物主を深く愛せねばならぬといふことは眞理にして決して笑ふべき話ではない、感すべき高尚な規則でゐる、斯やうな大切な規則を始めて教へられたのは、耶蘇・キリストにして、キリスト降生前の人々は決して之を知らなかつた、近世に至りましてもキリストの教を信じない國々の人は矢張之を知らぬ、却て此道理なる説を聽いて愚なことだと笑ひます、才智ある人學問

ある人で左様でゐる、何故人間は斯く道理に合ふ説を笑ふ程に智慧が暗んだであらうか、是れ第二篇に論じたる通り元祖アダム、エワの原罪の爲に人間は生るゝや否其罪に瀆れて仕舞たからでゐる、御覽なさい世界萬國に行はるゝ多くの宗教を、何れも皆な神とか佛を信じて居る、けれどもキリストの教を除く外皆な悉く神佛を懼れて居ります、何か危険物のやうに信じて居る、故に祭典とか祈禱とかをする時神怒に觸れぬやう、其崇りを防ぐやうするといふが、先づ第一の主意である日本の俚言に、觸らぬ神に崇りなしといふのは、神を懼れるといふ心を能く表して居ります、兎角他教では神を懼れるやうに教へる故、神に奉事には奴隸が主人に事へるやうな心を以てする、神を親の如く愛し、又之に奉事には親に孝行するやうな心を以てせよと教へる道は決してない釋迦でも、孔子でも、マホメットでも、神を愛せよといふたことは一度もな

い、獨りキリストが始めて神を愛せよと教へました、如斯高尚なる規則を立て、始めて人間に眞理を教へ、吾儕の暗んだる智を開き、振たる情を直すやうなされましたから、之を分つた人々は、其御教を難有思ひ、其御恵に深く感じ、先きにも陳べたる如く、キリストを捨てるよりも生命を捨てるが勝しだと思ひ、キリストの爲には喜び勇んで殺されるものが何百萬人といふはどあつたので、之は西洋斗りでなく、日本國に於ても長崎地方に御維新前何千人もありました（詳しくは太政官翻譯の「日本西教史」にあり）次に第二の誠命なる他人を己れの如く愛すべしといふ、此他人といふのは、人類といふ最も博い意味である、只親族朋友とか、或は己の氣に合ふ人、己の好む人斗りでなく、不見不知の人でも、己の好まぬ人でも、其上又己を害する敵までも愛せねばならぬといふ意味で、さりとして氣に合ぬ人までも親友の如くせねばならぬ、不義非道を以てする害

をも點つて之を受けよといふ譯じやない、如何に氣に合ぬ人、如何に己れを害する人でも、其ものを嫌ひ惡み、或は之を害し仇を報ふるなどのことをしてはならぬ、若又其等の人々に、難義不幸があつたならぬ、出來得る丈け之を助けねばならぬといふことじや、簡短に云へば、己れの好む所は之を他人にも施せよ、己れの好まざる所は之を他人に施すなどいふことで、何故又斯やうに他人を愛すべきやといふに、世界万民皆同一本原なる造物主より出でたるもので兄弟であるからで、又仇を返すはなせ惡るいかといふに、普通一般の人民といふものは、他人を罰する權利はない、人の罪を糺し之を罰するといふことは、人を支配するに同じである、人を支配するといふことは、一般人民に有つどころの權利でない、此權利のあるは萬物を造り又之を宰どる所の眞の神造物主の外有つて居らぬ、只造物主より其權利を與へられたるもの、

即ち國王とか政府とかいふもの丈、此權利を有つて居る、されど人民が私に仇を返す敵討をするといふは、勿論罪でゐる、之は甚だ明白にして分り易い道理ではあらんか、然るに此分り易い道理をもキリストの御教が無ければ矢張知らずに居つたのであります、例へば日本に於て昔より明治の初に至るまで仇を報ふるは當然のことじやと思ふたのみならず、君父の仇は俱に天を戴かずなといふて、仇を報せぬは却て耻のやうに思ふて居りました、其爲に殺害や争闘が度々あつたのです、日本のみならず他國も其通りであつた、然るに維新以來私の争闘仇討などは法律の禁する所となつて、此不道徳な悪しき習慣は全く無くなりました、是は何故なるかといふに、即ちキリストの御教を信仰する國に行はるゝ所の法律を日本國にも採用するやうになつたからである、ソウしてキリストの御教を信仰する國に行はるゝ法律は、其本を原ぬれを耶蘇基

リスト御降生前羅馬に行はれたる法律を以てキリストの教へたる誠命に照して改良したところのものでゐる、如斯基リストの誠命即ち天主教を以て改めて、始めて法律も完全しました、然るに天主教を信仰せず之を嫌ふ所の日本國に於て、天主教に依て完成せられた法律を布くやうになつたのは妙ではありませぬか、是蓋し外國のことも長所は採り短所は捨てるといふ主意から出たものでありませう、然らば何故に斯く法律を完美にする所の天主教を嫌ふのでありますか、諸君が右の話を聴きなされたら、天主教は貴い道であると思ひなさせぬか、天主教は眞正の開化を興へる道とは思ひなさせぬか、昔でも今でも天主教を信せぬ國、或は天主教より出でたる法律の行はれない國に於ては、人々に愛もなく、憐れもなく、眞理も知らず、人命の貴い所を悟らず、理由もなく或は些細な事故を以て、妄りに人を殺します、又た殺さぬまでも

威權あるものは威權なきものを厭制し、殆んど奴隸の如く扱はれること、丁度維新前の日本の如くであります、今諸君が何の心配も懼れも危険も無く、平然に日本國中何處如何なる津々浦々までも旅行することが出来るのは何の爲でござりませう、如何に貧しく卑しくとも如何に富んで貴いものに對し人民たるの權利に於て一步も譲る所なきを得るは何の爲でござりませう、實に天主教より出でたる法律が行はるゝやうになつたからである、如斯完全な法律が行はれましても、マダ〜悪しきことも無理なことも如何程あるか知れない、畢竟法律といふものは國の治まる爲に充分の効力あるものでござりませぬ、是非とも耶蘇基利斯督の誠命なる、己れの好む所は之を人に施せ、己れの好まざる所は之を人に施すなどいふ、高尚なる規則を守るやうならなければならぬ、若し此誠命を謹み守つたならば、世は實に平穩に成つて、亂れも騒ぎも悪事も無

理なことも無くなつて、警察も裁判も不用やうになるでござりませう、殊に又基利斯督の立てた宗教は、道德の大概を教へるの道でない、完全なる道德を教へるので、此道を能く守れを人々は眞の善人となられます、眞の善人とは行ひのみ善良てもまだ足らぬ、心までが善良ならなければならませぬ、耶蘇曰く凡て口より出るものは心より出るものなり殺害、姦淫、偷盜、偽證は皆心より出るものにして人を潰すものなりと(馬賽傳、十五章)又曰く古の人告げて曰く汝等姦淫する勿れと、されど我汝等に告ぐ婦を視て慾念を懐くものは心の中にて既に之と姦淫したるなりと(馬賽傳、九章二十、七節二十八節)此御金言を以て見ると、心に望みますれを行を以てするに同じで、心から矯め直さねむならぬといふことであります、故に天主教を信するものは惡の根なる心を正しくせねむならぬ、換言れを肉躰のみならず心をも潰すなどいふのである、吾儕は至善なる造物主の子で

あるから、心までを善にもちて造物主に孝行せねばならぬといふのでムリです、これを
 行を正しくするのも、世間の義理の爲や利益の爲や傲慢の爲や名譽の爲なれど、是皆
 振れたる善、不足な善で、虚飾の道徳である、全善なる造物主に違ふ積りで、肉躰も
 心も潰さず、善行をするのが真正の道徳で、諸君よ斯やうに教へる所の道は如何
 に高尚ではありませぬか、如何に完全ではありませぬか、是を以て他教と比較たなら
 ば、其優劣は考へるまでもムリですまい、サテ斯く完全なる道を立てることは、決し
 て人の力に及ぶことじやから、キリストは人間のみならず此世に天降り給ふたる真
 の神であるといふこと疑ひないではムらんか、又諸君は天主教を耶蘇教といふて邪教
 魔法のやうに思ひ、嫌ひ悪みなさるが、是も理由のない悪みじやといふことが分り
 でありませう、歐米各國の人は天主教の御蔭、耶蘇キリストの御心配で、人々の行は
 正くなり、人々の心は潔くなり、又た國々の法律は完全になり、風俗習慣は改り、世
 界が眞の開化に進むといふことを知り、之を信じ之を拜むのでムリです。

第六 御死去を以て耶蘇キリストの神なることを證す

天主教を信仰せぬ人々は、磔にされた耶蘇キリストを拜むといふことを、最も疑ひ又
 最も嫌ふところでムリです、成程眞の神なるキリストが、斯くも耻辱なる死様をなさ
 れたと聽くならむ、信じられないでムリませう、然し如何なる學問でも聽いたのみで
 深く其理を極めないならむ、信じられない話は澤山ムリです、例へば天文學は、地球
 が一晝夜に一回轉するといふ、是は疑ひない、なれども吾儕が目を以て見ますれど、
 毎朝太陽が東より出で西に没するから、却て太陽が一晝夜に地球を一回するやうに思

はれる、或時私が此ことを田舎の老爺に話すと、馬鹿なことをいふ若し地球が轉るなら
 を吾儕が下の方になつたときは桶の水は溢れ吾儕も何處へか落ちて仕舞なければなら
 ぬじやないかといふて笑ふた、天文學を知らなければ此老爺のやうに思ふは無理なら
 ぬことでゐる、けれども深く其理を調べれば前の疑ひは全く晴れて、地球の自轉を承知
 するのでありませう、基利斯督の磔に架けられたといふ話も丁度其通りで、始めて聴い
 たらなら此老爺の如く信じないのみならず馬鹿な話じやといふて笑ふでゐる、然
 しながら深く其理由を極めたなら、矢張之を難有思ふやうになります、前にも陳べ
 たる如く耶蘇基利斯督の御降誕せられたは二つの理由があります、一は吾々人間は原
 罪の漬を受けて智は暗み情は振れて仕舞たから、眞の道徳を教へて智を開き私慾を仰
 へさせる爲め、二は元祖より傳はりたる罪の償ひを爲し、其漬を洗ふて下さる爲めで

ゐる、其には何うしても吾儕の身代となつて、吾儕の受くべき罰を受けねをなませ
 ぬ、是基利斯督の大なる難義を爲され、耻辱なる御死去即ち磔に架けられた眞の所以
 でゐります、ソコで基利斯督が惡人の如く磔に處せられたといふことは、一寸考へま
 すると其神なることを碍げるやうじや、けれども其御死去といふことに就て新約全書
 のみならず猶太、希臘、羅馬などの歴史に依て調べたなら、是に依て却て眞の神な
 ること及び救世主なることが確かに分かります、基利斯督は御自分の死去に就ては
 多くの猶太人及其弟子等に向ひて度々豫言されました、即ち耶蘇言たまはく、吾は人
 々の手に賣るべし、而して人々吾を殺し吾三日めに甦へらんと(馬傳第七章)又曰く吾は司祭
 長等と學士の手に賣れ、彼等之を死に定めん、而して凌辱しめ鞭たしめ且十字架に釘
 けしめん、斯て三日めに甦へらんと(同傳十)又曰く吾の來れるは人々の救贖に其生命を

損ん爲めのみと(同傳)又曰く汝等は知る二日の後は逾越節にして、吾は十字架に釘られん爲に交付るべしと(同傳二)如斯度々仰せられたを見れど、基利士督は其如何様にして死すべきやといふ事は、前以て御承知のことで、其難義を受けるも耻辱苛責を與へられることまでも、元來基利士督の聖慮でゐる、決して悪人の爲に止むを得ず殺されたといふ譯でないことは甚だ明かである、然らば基利士督は眞の神なること疑ひない、若し人間ならむ自分の往末を先きに知ることが出来ない、今吾儕は病氣を以て死ぬか、負傷で死ぬか、水に溺れて死ぬか、豫め知るものは一人もない、然るに基利士督は自らの往末を明言した、是れ基利士督の眞の神なる確證ではゐらんか、然しながら諸君は、勝れたる道徳を教へ、病氣を癒し死人を甦らせるほどのな、眞の神なる耶蘇基利士督が、猶太國の役人に裁判され、磔刑に處せられたといふことは、餘り變な話じやと

れ疑ひでゐりませうが、其は一言に申せむ基利士督が悪を懲すといふことに就ては、如何なる高位のものでも微少も假籍といふことが無かつたからである、即ち當時猶太國の人民に重せられた教師學者の輩は、フアリセオといふて、甚だ傲慢に、輕薄にして、只名譽のみを喜んで表面の行を飾り、内心には道徳に背き造物主に逆く偽善者でありました、故に基利士督は彼等が如何程人望を得、勢力を有つて居ると雖も、少しも容赦なく、屢々彼等に向つて之を戒め、之を叱り懲しました、其のみならず、衆多の人々の目前に於て、其傲慢なる心を挫き、其偽善なる行を嚴重に咎めました、一例を擧ぐれば耶蘇言たまはく偽善者なるフアリセオ徒よ汝等は外部を淨むれども内部には貪慾と不潔充滿り吁嗟蛇よ蝮の裔よ彼等いかで天爵を遁れんや(馬爾傳二)如斯嚴重なる語を以て戒められましたから、彼のフアリセオ徒なる教師學者の輩は、大に耻か

しく思ひ、甚く基利斯督を嫌ひ惡み、飽までも之を殺したいと思ひ、色々工夫を以て人民を煽動せ、終にセルザレム府にある羅馬の奉行ポンシヨピラトに、彼を裁判するやう無理に迫らせました、奉行ピラトは若し基利斯督を裁判せぬならば、如何なる騒動を惹き起すやも斗られないといふことを怖れて、止むを得ず彼を裁判したので、けれどもピラトは其心に基利斯督は何の罪も無いと知つて居りましたから、昔しの習慣の通り衆多の人々に向ひ水を以て其手を洗ひ、彼の善人なる耶蘇基利斯督の血は、吾に係はりなしといひて磔刑の宣告をいたした、故に西洋の諺に怯懦にして義に背き、無辜民を罰する役人を指して、ピラトの如き人と申す、耶蘇基利斯督が磔に處せられた事情は、是でれ分りてふりませうから、是より其御死去の時に當つて、非常なる天變地異があつて、造物主の全能が顯はれたといふことを話いたしませう、耶蘇基

リス督がカルワリオ山の頂上に磔に架けられ給ふ時には、盜賊二人の中間に其十字架を並べ立てられました、ソウして其二人の盜賊共は、只繩を以て其手足を柱に縛り付けた斗りでありましたが、基利斯督は之を苦しませる爲に、長き釘を以て其御手足を打付けるといふ殘忍、極まる仕方でありました、其日は命曜日にして、時は恰も晝の十二時頃でありしにも係らず、今迄平常の如く輝いたる日光は、雲が翳るでもなくして、急に光りは消へて四方は暗黒になり星までも見へました、此不思議なる出來事を見て、セルザレム府の人民は太く恐れ、衆多の人々は基利斯督を非凡人と思ひ信じた、此晝俄に暗くなつたといふは、獨りセルザレム府の近邊のみならず、猶太國のみならず、近國中にも及んだと見へます、何故なれを希臘國の昔の歴史家、スイダス、タルルース、フレゴンの三人はオリムピアデスといふ年代記に、此事を委しく記した、又

ドニ大といふ雅典府の有名なる元老院議員は、之に就て世界を宰する神の苦む徴か、或は世界の亂れる兆だらうと曰ひました、是は西洋の小學校に教へる歴史にまで書いてあります、ソコで此暗黒は凡三時間斗りで午后三時頃キリスト督が御落命なされます、其時に地震があつて、彼のカルワリオ山は二つに割れた、其割目は丁度キリスト督の柱の側でありました、其處に居りました番兵長のカスシウスといふものは、之を見て大に驚き、キリスト督は人間に見へるも眞の神に相違ないと云ふて、奉行ボンシヨピラトに願ふて其職を辭し、熱信なるキリスト督の弟子となりました、此地震は随分劇しくて、希臘、羅馬にまで波及だ、其は希臘、羅馬の歴史に書いてあるのを見て分ります、又其時に生じたカルワリオ山の割目は、今日にも遺つて居りますが、是に就いて珍しい話があります、即ち近年に當て英國人ハヤソンといふ地質學者が、キリスト督の

遺跡を觀覽の序で、彼のカルワリオ山に登り、其割目を見、又た之を調査しました、所が大に驚いた、地質學上から見れば、何うしても只地震に依て生じたる割目と見へぬ、一種特別の原因即ち神の力でなければ出來るものでないと思ふた、此地質學者は其後熱信なる天主教信者となりました、サテ如斯耶蘇キリスト督が御死去の時に當つて、天にも地にも造物主の全能が顯はれたといふは、其眞の神なることを證據する爲であります、而して是等御死去の時、天變地異は、新約全書のみ記されたることでなく、猶太、希臘、羅馬三ヶ國の歴史に書いてあることで、此三ヶ國の人民は、キリスト督を信仰しなかつたのみならず、昔に於ては酷くキリスト督の教我天主教を迫害た國である、故にキリスト督の爲には敵國でゐる、其敵國の歴史に記載してある事ですから、誰れでも之を偽といふことは出來ない、斯く確かなる證據があつてもまだ信せぬならん世界

各國何處の歴史も信する所以はない、アレキサンデル、ナポレオンの事跡も虚と云はなければならぬ、神武天皇太閤秀吉の歴史も偽りと云はなければならぬ、けれどもソナナことを云ふものは一人もありません、然らば何故獨りキリストの歴史のみ疑ひませうか、實に故由ないことではムらんか。

第七 御復活を以て耶蘇キリストの神なることを證す

本書第一篇より陳べ來りました所は、甚だ長いと申しても、之を簡約て申上すれど、天地萬物を創造なされたのは造物主といふ御一体に在す神さまである、又造物主が人間を造り之に不滅なる靈魂を賦與なされたのは、人間に終りなき幸福を得させるといふ難有聖慮に出でたのである、然るに人間の元祖が造物主に背いたる其罪の

爲に、世界は變じて人間の爲めに難義苦痛を與へるやうになり、人性は潰れて智は味み情は振れ生れながらにして惡に傾き、今世の幸福のみならず來世の終りなき幸福をも失ふべきものとなりました、造物主は之を憐み給ふて人間の罪を救贖爲に、耶蘇キリストを御降誕せしめられた、故に之を救世主と信するのである、ソウして其救世主なる耶蘇キリストは、假りに人間の肉體と靈魂とをね受けなされた造物主であると信する、是が天主教の大体の教旨でムります、故にキリストが人間なるのみならず、又眞の神であると證據するのは、天主教に取りて一番川要でムる、依て豫言、誕生、奇跡、教訓、死去と此五つを以て證據いたしましたから、最早キリストが眞の神なることに就ては疑ひはありますまいと思ふ、けれども造物主は吾儕人間の如き智が味み情が振れたるもの爲には、まだ足らぬといふ聖慮で、今迄の證據よりも猶一層明確

な證據をね視しなされました、依て其證據をも一つ申上ます、其は即ち基利斯督の復活でゐる、復活とは死者の中より甦つたといふことでゐる、基利斯督の御弟子等が生命を捨て、まで其神なることを證據する程の、確かな信仰が起つたのも、此御復活を親しく視てより後でゐり申した、ソコで先づ人間の死ぬといふことは靈魂と肉体とが分離といふことである、即ち靈魂は吾儕の生命の本原で其方に依て肉体は活動して居るのですから、分離ならぬ直に肉体の活動が無くなる、之を死といふのであります、故に甦りといふことは一時氣絶した人が息を吹き返したといふやうなことでない、全く靈魂と肉体とが分離して後復び屍と合して已前の通り活動するといふことであります、如斯甦るといふことは人力に及ぶことである、人間を造りなされる程の全能なる造物主の力でなければ出来ないことじや、故に耶蘇基利斯督が、磔に架けられ死して後三

日目に復活なされたといふことが眞實なれを、基利斯督の眞の神なる明確なる證據で、之よりも明確な證據は決して立てられない、依て是より基利斯督の復活は果して信するに足るや否といふに就て申上ませう、サテ前の演説中にも陳べたる如く、耶蘇基利斯督は屢々衆多の人々に向つて、吾は人手に殺されて後三日目に甦るべしといふことを豫言なされました、故に此事は猶太人中に言ひ傳へて大評判されました、之を以て其御死去の日彼のフアリゼオ徒なる教師等は、奉行ポンシヨピラトの館に詣りいふのに彼の教唆者基利斯督は尙生る時自ら死後三日の後に甦るべしといふた、故に若し其弟子等が夜中竊かに其屍骸を盗み去り、之を隠して基利斯督は死者の中より甦へりたりなど、言ひ觸さぬ、後の惑謬は前よりも更に悪しからん、故に番兵を以て彼の墳墓を三日目まで守らせよと願つた、依てピラトは其云ふがまゝに、番兵を五六人遣し

した、基利斯督の墳墓といふのは、今日にも遺つて居りますが、礫に架けられたるカルワリオ山の麓で、人が掘つた深い横穴でゐります、彼の教師等は、番兵を付け置くのみならず堅固にも堅固と注意して、其當時の習慣の如く、大なる石を墓の前に轉せし、繩を以て其石を縛り着け、之に封印まで致しました、故に其屍を竊むこと出来ないので、傍に立寄ることさへも出来ないから、教師等はもう安心して居たのです、是は金曜日であります、所が其夜も其翌日土曜日にも異状は無つた、然るに三日目即ち日曜日の黎明になりますと、俄かに地震があつて、墓の前なる大石は側に轉び、基利斯督は甦て、其面容は太陽の如く光りを放ち、墓より出させ給ふた、之を視た番兵等は大に怖れ、セルザレム府に逃げ歸り、惶急教師等にありしことを話しなければ、頑固なる彼等は、之を聴いても尙改心せず、只困まつて種々と相談し、

遂に卑劣な手段を回らし、彼の番兵等に口止金を多く與へ、且つ弟子等夜來りて己れ等の眠れる間に彼は盗み去りしと言へど命じた、此流言は猶太人中に弘まり、今日に至るまでも猶太人は基利斯督の屍を盗まれたといふて天主教を誹謗て居ります、なれども虚言といふものは兎角頭尾合ぬもので、何故といへど、眠つて居るとき如何にして弟子が其屍を盗むことを知りしや、野蠻人でも承知出来ない愚な虚構言ではらんか、是に反して基利斯督が復活したといふには、其證據は澤山あります、基利斯督の復活といふことは、實に天主教に取りて最も大切なることで、殆んど基礎とも申すべき程な肝要なことでありますから、基利斯督は之に就て分明なる證據を立立てなされた、即ち基利斯督は御復活なされて後は、此世に尊容を見せなかつたといふやうなことではない、却て度々其弟子や衆多の人々にも顯はれました、故に御復活後の耶

蘇基利斯督を親しく目撃たものは何百人といふほどであります、今一々擧げることば
 出来ませぬから一二を申上げませう、即ち御死去より三日目の日曜日の朝、マグダレ
 ナといふ熱信なる婦人に顯はれ、同じ朝ペトロ、ヨハネの二人の弟子に顯れ、其夜
 エムマウスの二人の弟子に顯れました、其後セルザレム府のセナツルといふ家に十
 一人の弟子等が集つた時にも五六度顯れ、格別ガリラアといふ地に於ては五百の信者
 に向つて顯れました、ソウして是等顯はれ給ふたのは只其容姿を顯はしたといふ斗り
 でなく、時としては其手足より胸までも探らせ、又或時は食物を求め給ふて之を弟子
 等の前に食たこともあります、是は弟子等が駭き懼れて其復活を疑ふて居りましたか
 ら彼等に確信させんが爲めであります、且又昔より基利斯督に就ての多くの豫言の悉
 く成就したること、其他福音を宣傳へるに就の種々のことを教訓られました、元來十

一人の弟子等を始め多くの信者は、基利斯督の教訓を三年の間度々聴きし、又奇跡
 などをみ度々視もしたけれども、彼等は大に量見違ひを致して居つたのです、基利斯
 督は人間を救ふ爲に難義耻辱を受け人手に殺されるのであるといふことを曉らず、却
 て英雄豪傑かの如く信じ、後必ず世界萬國を攻め取つて世界中を支配するやうな大王
 になるだらうと斯やうな考へてありました、所が豈に圖んや悪人の手に交付され、彼
 等の爲に磔の刑に處せられて死んで仕舞ふたから、彼等の見込はスツカリ外れ、落膽
 し且つは御死去の後には己れ等も難に遇はんことを恐れて、一生懸命に隠れて居りまし
 た、然るに基利斯督が復活して種々様々教訓されたから、弟子等は始めて夢の醒めた
 る如く智が啓け、舊約にある豫言の意味をも悟り、又基利斯督が嘗て吾は十字架に釘
 けられ死して三日目に甦るべしと言ひ給ひしことをも今更の如く思ひ出し、其御降臨

の理由及び造物主の憐み深き聖慮も漸く分りましたのです 如斯弟子等が最早復活を
 確く信じ疑ひませぬから、ソコア四十日目にセルザレム府より半里ほど隔りたるオリ
 ベトといふ山の頂上に、弟子等始め百二十人のものを集め、吾に就て舊約に録された
 る豫言は今悉く成就せり、故に吾は汝等を離れて天に昇るべし、汝等は萬國に往き人
 々に眞の道を宣べ傳へよ、聽いて信するものは救はるべし、信せざるものは救はれず
 と仰せられ、彼等の面前に於て昇天せられました、ソコで彼の弟子等は、汝等萬國に
 往き萬民に教へよといふ命令に従つて、歐羅巴小亞細亞印度地方までも往き、如何な
 る責めに遇ふも如何なる難義を受けるも顧みず、生命までも捨て、天主教を擴め、耶蘇
 基利斯督の眞の神なりといふ證人になりました 今日に於ても吾々天主教宣教師は、矢
 張右の弟子等と同じく救世主基利斯督の證人となり、其御恩を世界萬民に同じく蒙ら

らせたいといふ望みで、日本にまで來たのであります、否日本のみならず朝鮮支那西
 藏などの國々の布教に生涯を委ねつゝある天主教宣教師は多数あるのであります、ソ
 ュして彼等は千八百年前吾々の先祖なる歐羅巴人が、亞細亞人より救世の深き恵み
 を受けた、即ち眞の道を教へられた其恩に今日報る積りで居るのであります、何せな
 れは救世主は歐羅巴でなく諸君と同じ亞細亞洲中で御降誕せられたので、色々の障
 のため亞細亞に擴まらず、却て歐羅巴に盛んになつて今日に至つた宗教だからで
 ます。
 傍右に申上げた基利斯督の復活といふことは、諸君から考へたならを實に不思議な話
 じや、不思議な話じやから信じないものも多くありませう、然ながら不思議とは元來
 何ですか、人間の力に及ぶこと、或は平常に目に觸らない見慣ぬこと、或は能く分

らぬこと、是皆な世人は不思議といふ、ソウして如何に不思議なることでも、目に慣れたものは不思議とせぬ、然れども是は考へ足らぬ人のいふことである、不思議とは果して如斯ものならむ、世に不思議ならざるものは一つもない、如何となれを世界にありとあらふる物及現象は分らぬこと斗りてゐる、人々は否學者までも僅か皮相の理を説明するに過ぎない、一步を進むれば凡て五里霧中でゐる、今日月星辰を始め地球に至るまで、皆是有形物じやから始めある、故に今より何百万年かの前は全く無何有であつた、只無遍なる造物主の全能に困てヒヨクッリ出来た、之は不思議ではありませんか、一粒の籽種が地に落れを如何忽ち細き根は地に潜り青き葉は空に向て延び穂を生じ花を開く、人々之を見て不思議とせず、然れども彼の石の如き小さき粒の中に生命の根原は潜伏で居り、之を地に投せずを何時までも眠り、一旦水田に投るゝや忽

醒めて芽を出す、考へ來れを之も實に不思議でゐる、夫婦の間に子を産むことは如何人々は不思議とせず、然れども名醫も之が説明は出來ぬ、人の眼といふことは如何、人々之を不思議とせず、然れども死者ならすして見ることもなく聴くこともなく、心理學者も之が説明は出來ぬ、是皆な實に不思議ではゐらんか、又吾々が毎日飲む所の水は如何、之を分析すれば酸素水素の二つが合したものである、此二つは何れも氣體で、殊に水素は燃へ易い爆發し易い瓦斯でゐる、此氣體なる二つのものが合すれば水といふ流体となる、是は實に不思議ではゐらんか、又吾々の食物に味を附ける鹽といふものは如何、之を分析すればソヂウムといふ金屬とコロールといふ氣體の元素と合したので、ソヂウムは水に入れゝを燃へるといふ珍しい金屬コロールは有毒の瓦斯で胃に入れを人が死るに此二つのものが合すれば人間に一日も無くて叶はぬ鹽と

なる、之も不思議ではらんか、如斯世界の事物凡て分らぬ不思議のみで公る、故に哲學者ニコラは曰ひました、吾々は習慣と無學に如何程欺かるゝやを知らず、吾々は全く不思議の中に埋まり、絶へず彼を飲み、絶へず彼に手を觸れつゝある。然れども吾々は不知不識事物の表面に滑べり、習慣に欺かれて、吾々を圍む所の不思議を一つだに認めぬ、故に吾々は一つの事をも知らぬといふことを知る爲にも大學者とならなければならぬと、又哲學者マルブランシュも曰ひました、世人は容易く思ふ、毎常に目に觸れる所の現象の理由を知ると、而して彼等に之を問へむ、人々皆知る所の平凡なる説を以て立派なる答へとして居る、今試みに彼等に一個の雞卵より如何にして一羽の雞の孵化やを問はん、彼等は易々として牝鳥の温むる故なりと答へん、一粒の麥種が如何にして地を貫きて生へ根を張りて穂を出すやと問はん、彼等は雨の爲なりと答へて満足せん、然れども如斯平凡なる答へは、誰れか爲す能はざるものあらん然らむ之を學者に問はんか、學者は曰く濕氣と熱との二力の作用で麥粒が腐敗して芽を生ずるに至ると、嗚呼是五十歩百歩の差違のみ、其原理の一斑だに解き得ぬ、是れ彼等が幼年の時、學校に於て其師と仰ぐ人より斯る平凡なる説を教へらるゝも、彼等は崇拜心に引かされ、其説を其儘に飲み、又之を其儘に吐出して答へるといふ義務なりし、斯る平凡なる説も屢彼等の耳を穿てむ、遂に原理を解き得たりと信じ他人にまで教ふるを憚らざるに至る、然れども日々目に觸れる現象は悉く皆不思議にして其原理を解り得る學者は一人もゐることなしと、實に右云はれました通り吾儕人間には只全能なる造物主の妙力で出來ると知るの外、決して明かに分ることは何一つとして出來ない、されむ基利斯督が死者の中より復活したといふ事も、矢張全能なる造物主

の妙力に依て出来たと知るより上に知ることには出来ぬ、けれども私は思ふ、萬物を造るといふよりも、否々二つの氣体を合せて流動物なる水となし、有毒なる瓦斯を以て鹽と成すことよりも、死者を復活させることが如何程容易いことなるかと、故に不思議とは、只人間に取てのみのことでゐる、實際には不思議といふべきものでない、されどキリストの復活といふことを論ずるにも其理を極むることは出来ない、只歴史上から調べて、眞か偽かを知るの外ありません、コソテキリストが悪人の手に捕へられた時には、其弟子等は如何であつたか、彼等は忽ち逃げて仕舞ふた、又磔に架けられ死んだ時には如何、彼等は難の其身に及んことを恐れ隠れて居り、且は其主を失ひ途方に暮れて居りました、之を以て見ますと、彼等は如何に怯懦なる人出でありましたらうかは想像ます、然るに御復活後俄然に其性行は一變して、キリストの爲には、

白刃をも懼れず、水火をも避けず、生命をも喜んで捨てるといふやうな、勇氣を生じたのは果して何の爲でゐりませうか、何うして先には彼が如く弱き人間が後には俄かに此の如く強きものとなりましたか、實に其復活したキリストに親しく接して、眞の神なることを確かに認めたらうからでゐりませう、此一事を以て考へても、キリストの復活は何うしても信じねむならぬ、尙其外明かなる證據がある、先づ歴史に依て見ますと、キリストの御誕生御死去御復活御昇天などの事は、其弟子等斗りの僅かの人々の間に秘密にあつたことでなく、多衆の人々の間に於て公然にあつた事でゐる、故に猶太國は申すに及むず、希臘羅馬の國々までも大評判のことであつた、其故に小亞細亞から歐羅巴各國に古來行はれたる宗教を、忽ち逐ふて、キリストの教が之に代るやうになつたのである、ソツして是等の歴史は、決して往古といふ程のことでない、

今より僅か一千八百年前のことじや、今日の如く進歩した所の歴史學を以て調べたならん、如斯新しい年代の話は、其虚か實かは極々分り易い、然るにも係らず、彼の無宗教家が飽迄基利斯督の教に反對し之を打毀したいと思ふものでも、決して歴史上から攻撃ものは一人もふらぬ、是れ歴史上の議論をすれど、却て其證據が顯然擧るからでムります、故に彼無宗教者等は、動もすれど、設ひ基利斯督にせよ一度死した人間が復活するといふは學理に合はぬ、左様な奇怪なことを信ずるは妄信であると、斯やうにいひます、是は却て基利斯督の歴史を證據するものではムらんか、歴史といふ明かな證據を、眼があつて視ぬやうな盲目なる人間と論ずるは無益でムる、然れども慨かましいことには、今の世界の有様を見れど、ソレ云ふものがなかく多い、明かな證據があつても、其を信じないのは何故であるか、其所以は唯一つじや、彼等は基利斯督の神なることを信ずれど、是非とも其教へた道を踏み、立てた規則に違はぬをならぬ、其道を踏み其規則を守るには、傲慢邪淫貪慾の邪なる情を始終抑へぬをならぬ、偷んだ金或は不正の利益は之を返し之を償はぬをならぬ、妾があれを之を放逐しなれをならぬ、他人を輕蔑する心は之を抑へぬをならぬ、酒に酔ひ博易に耽る悪しき癖は之を改めなければならぬ、如斯罪を避けるの心配を嫌ふといふ譯計りでムる、尙又彼等が一番厭ふ所は、吾道に違ひ行を改めなければ、死后終りなき罰を受くべしといふ基利斯督の金言でムる、彼等は此金言を偽りとして、其心に安心を得たいから基利斯督は神でない絶叶いでムります、斯やうな人間が如何程多くても、證據が足らないといふ譯でなく、只々基利斯督の立てた所の道徳を守ることを嫌ふといふ譯斗りじや、マルブランシエ氏著の眞理の研究といふ書に、今日に於て數學幾何學を疑ふ

もの一人もなし、されど数学幾何學が偽りといふ説が、不品行なる人々に益あらむ、斯る愚説をも唱ふるもの數百萬の多さに及ぶべし、彼等は造物主、靈魂、道德、基利斯督などに就ては、人性を辱かしひる程の愚論も之を唱ふることを憚らざるが如く、數學幾何學の如き疑ふべからざる學問に就ても、同じく愚論を吐くなるべし、彼等は凡て不品行を助くる議論は喜んで之を飲むものなり、此奇怪なる人間は、振れたる情に從つて他人を欺くことよりも、已れを欺くことを猶一層大なる快樂とするなりと、諸君は何うか之に反して、振れたる人間の情に負けず、心を高尚に持つて、今世に於ける難義心配を措かず、來世に於て終りなき幸福を得るやうに、基利斯督を信じ、基利斯督の教へ給ふた道德をれ守りなさるやう希望致します。

第八 耶蘇基利斯督は世界を如何に感化せしや

以上申上げた所の、耶蘇基利斯督の誕生、奇跡、死去、復活、昇天などのことを以て見ますれを開闢以來生れ出でた一切の人間とは全然違ひ眞の神に相違ないといふことは明かにれ分りてゐりませう、故にコペルコック、ガリレオ、ニュートンの如き天文學者、コロンブスの如き地理學者、キュヴェーの如き博物學者、パスカル、ボスウェ、デカルトの如き哲學者、バベン、アンペール、エヂソンの如き物理學者、バストールの如き細菌學者、シャルレマーギニ、ナポレオンの如き高名なる王に至るまで、皆な基利斯督を尊敬するのみならず眞の神と堅く信じて肅んで拜むで居つたでゐります然し今假りに誕生、奇跡、死去、復活、昇天などのことを悉く除いて只其教へなされた道德、れ守りなされた善徳といふこと丈けに就て考へて見ましても、迎も他の人間と

比べることは出来ない、他教の開祖は勿論孔子、ソクラテス、プラトン、アリストットルなどの哲學者は、高尚なるキリストに比べては、心も行も教へた道も餘りに卑くすぎます、之を以て其教へられたる道即天主教は、人情、風俗、習慣、政治、法律、戦争に至るまで、非常な變化を興へたので、實に是等種々のことは、キリストの教に依て一大革命を致したといふても、敢て過言であるまいと思ふ、如斯基利斯督降生前の世界と、其後の世界とは、全く異なるものと思はるゝほど變つた、一言に申さむ、世界はキリストの降生に因て眞の開化になつたから、之を以て耶蘇キリスト誕生の年を、世界の紀元と致したのであります、即ち年代を數へるに、キリスト誕生の年を第一年とし、其より前へ溯つて數へ、或は後へ數へる、例へばアレキサンデルは、キリスト誕生の年より三百五十六年前に生れましたから、紀元前三百五十六年に

生るといひ、ナポレオンは、キリストより一千八百二十一年後に死んだから、紀元一千八百二十一年後に死すといふの類であります、故にキリストの降生は、世界歴史の元基となつたので、世界の歴史を圖とすれば、キリストの降生は其中心で、今日世界に於て此紀元を用ひない國を挙げますれば、現世に於ては財力の及ぶ限り數多の妻を娶るほど來世に於ては善人が賞として神より美人を興へらるゝと信するほど、不徳不品行なる回教人、白象を神として拜むシヤム國人、眠に固つたる支那人等であります、亞非利加内地の黒奴、大洋洲の多くの小さな島なる、人間を食ふほどな野蛮なる民は、曆もなく、年を數へることまでも知らぬものであります、此一つを以て見ても、キリストは他の人類と大に異なることが分る、已れの名が世界の紀元になるほど、世界に恩恵を興へたものは他に一人もない、然るにキリストは、世界に如何なる

恩惠を與へましたか、諸君よ少しく眼を廣く着けて、世界萬國の昔と今とを調べて御覽なさい、基利斯督降生前、即ち今を去る凡一千九百年前の頃、世界各國の狀態は如何でありましたか、當時に於て、最も開化を以て呼る、國、埃及、希臘、羅馬三國の宗教、法律、習慣等を除いて、只其國に開けたる、學問、機械など斗りを以て見ますと、實に感心であります、蒸氣や電氣の機械などこそ無つたけれども、今日の學者の及ぶ機械や發明や工事があつた、例へば埃及國王は、己れの墳墓を建てる爲に高さ塔を築いた、其塔は幾基もあつて、今にも遺つて居ります、日本の學校に用ふる地理書に記してある、此塔は五六間四方もある大石を積み重ねて建てたものですが、如何なる機械を用ひて斯やうな大石を高い所まで積み上げたか分らぬ、今日は蒸氣仕掛の完全なる機械があるといふても、斯やうな大工事はなかく面倒じやと學者等がいふ

て居る位でゐる、又希臘國の名高い學者、アルシメードといふ人、算術や、何に就て種々規則を發明した人、此人はシラキューズといふ港が敵に圍まれた時、半里も沖合に泊つて居る敵船に向けて、六尺四方もある石を投げ附け之を撥し、或は又鏡を以て太陽の光を反射させて、半里對なる敵船を焼いた、是は如何なる工夫を以てしたか、ドナ機械を用ひてしたか、今日の理化學者に分らぬ、又彼の羅馬人の建築物を御覽なさい、如何に其規模の大きかつたは、今日にも遺つて居るから分る、羅馬人は水道と道路を造ることに於ては世界第一でありました、二千年前に彼等が造つた道は今にも遺存してある、十九世紀は學問の世紀と名づける程開け進むだといふても、今の土木師は二千年前の羅馬の土木師に比ぶれを、まるで素人といふてもよい位でゐります、又最も驚くのは羅馬人の劇場と祝典である、今日の歐羅巴亞米利加各國のものを之に

比べたならむ、殆んど兒戲の如くでゐる、例へて羅馬府にコリゼといふ劇場がありました、之は今日の演劇とは違ふて、猛獸などを闘はせる場所でありましたが、其中へは無慮十萬九千の観客を緩々入れられる、ナント大きな建築物ではゐらんか、是は今日にも半分丈け遺存て居ります、傲慢なる現十九世紀に當りましても、一萬の観客を入れる劇場は、世界中一ヶ所もない、タイテュスといふ羅馬王が、右のコリゼなる劇場の開きを致した時、人々を悦ませる爲に猛獸を闘はせました、其時殺された猛獸は一日九千匹でありました、トラジャンといふ羅馬王の祝ひには、一萬二千匹の猛獸が死にました、又プロブスといふ長者は、其祝ひに當てコリゼ劇場の中に、駝鳥千匹、野猪千匹、鹿二千匹を一時に入れて殺し、其翌日は牡獅百匹牝獅百匹熊三百匹豹二百匹を一時に入れて闘はせ殺しました、是等の猛獸は御存の通り、イタリヤ國に産す

る動物でない、皆遠方なる亞非利加亞細亞の國々より運搬だものでゐります、斯やうなことが、今の微弱人間の力に及びませうか、今日の祝ひは羅馬の人の祝ひに比べれば赤兒の玩弄でゐります、之を以て考へますと、昔是等國々の富裕なることは想像されぬほどでゐる、サテ如斯種々の機械發明建築物などあり、富榮へた國々じやから開化した民と申されませうか、決してリウでない、是等國々に行はれたる宗教、法律、習慣、風俗などを見れば、實に野蠻と云はなければならぬ、彼等は人間に貴さなこと、人間の権利の重んずべきこと、人間の生命の大切なることを少しも知らなかつた、故に彼等は何の憐みもなく、輕々しく人を殺しました、例へて其頃希臘國に於ては、羸弱の人間は國の爲に益がないとして、子が産るれば、先づ役人が其子の體格の検査をして、強いか弱いかを見、若し弱い生來と見れば、即時に之を殺すといふ残酷な法律

がありました、而も之はリキエルクといふ、高名なる學者の立てた法律でゐる、希臘人が斯まで人命を輕んずるは、何の爲めでゐりませうか、眞の道德を知らなかつたからであります、又羅馬國に於ては、彼のコリセの劇場に於て、猛獸の闘ひよりも、人間の戦ひを見るのが、人民の最も悦ぶところでありました、故に戦ふことを職業とするものが何萬人もあつたんです、之は日本の角力取のやうなものです、違ふ所は眞劍を以て勝負を決めるので、多くの中には傷けられもし殺されも致します、ソコで二組に人數を分け、戦争して勝つた方の方は、観客に負け組のものを殺すか許すかと問ふ、其時観客が黙て居れを殺し、手を擧ぐれを許すといふ方法であります、祝日に當て、如斯觀覽物の爲に生命を捨てる人の數は、實に夥しいことでもあります、例へばトリアン王が、マスといふ民と戦つて、勝利を得たとき、之を祝ふ爲に右の

劇場に於て、一萬人のものが戦争して、其三分の二即ち七八千人は殺されました、二千年前に於ては羅馬人の爲めに、第一等の愉快とする所は人間の多く殺されるを觀るといふことであつたとは、如何にも殘忍な人情ではありませんか、其他羅馬國に於ては、戦争で捕虜にしたものは悉く奴隸にするといふ習慣でありました、御承知もムりませうが、奴隸といへば全く牛馬と違ふことなく、其主人の束縛を受けて、少しも自由なき人間でゐる、甚しきは理由もなく之を殺しても何の咎めもなかつたものです、羅馬の歴史を讀みますれば、奴隸に就て酷い話が澤山ある、其一二を擧れば、ポルリオンといふ羅馬府の參議の如き人は、鰻を大層嗜でありました、故に鰻を肥す爲めに毎日奴隸を生ながら、池に投込で其餌食に致しました、斯やうに酷いことは、其頃幾位もあつたんです、人間が何うして斯程までに情が振れて智が暗ましたか、是れ實に

眞の神を知らず眞の道を知らずして、僞神を拜み僞神を信じたからであります、彼等の拜む神はマエビチールといふ傲慢の神、ハッキュースといふ飲食の神、ヴェユースといふ邪淫の神、メルキユルといふ偷盗の神などであります、斯やうな僞神を拜む宗教が、何うして眞の道德善徳を教へませうか、其情の殘忍なること、野蠻なる人食人種と少しも違はぬといふは當然でゐる、サテ右申上げたる如く、學問や機械や普譜の仕方如何程進むでも、如何程國が富榮へ祝祭を盛んにしても、人を厭制し人の生命を輕んずるやうな、不義不徳なる國は、決して開化といふことは出来ずまい、世界の歴史を以て廣く考へますると、疑ふべからざる規則が發見される、即ち眞正の開化は知識に關する學問、發明、機械や、肉體に關する遊嬉、快樂、富裕などを以て得るものでないといふことでゐる、人が財産家で宏壯な家屋に棲み、美麗な衣服を纏ひ、甘

味食物を食べ、美酒に酔ひ、佳肴に飽き、往々に車あり、返るに馬ありといふ、贅澤三味の暮をするから開化人とは云はれぬ、國に大中小の學校を設け、新聞雜誌を發刊し、電信は蜘蛛の巢の如く張り、鐵道は碁局の目の如く布き、長さ陸迫を鑿り、壯なる會社を立て、も、それで開化した國と云はれぬ、尙又其上に、陸には何萬の兵を備へ、海には何十百艘の甲鐵艦を艇べ、法典は完備し、下は町村郡縣會の地方自治機關も出來、上は國會を開いて代議制が行はるゝといふやうでありますも、其國人民に道德といふ唯一つのが缺けて居つたならぬ、決して開化國と云はれぬ、ソウして人民が道德を辨へ、又之を重ずるといふことは、眞の道を知らなければなりません、眞の道に依らずして、只學問や機械などが開進むたならぬ、民は益傲慢に傾き、眞理を忘れ、飛んだ不道德に陥ります、従つて國は漸々衰微して、遂に亡びて仕舞、是は

疑ひない天下の規則でゐる、試みに歴史を繕いて、古の旺盛なりし埃及、波斯、希臘、羅馬の諸國を見よ、彼等の開化は有形的であつた、物質的であつた、開化の基礎なる眞の道と知らなかつた、造物主の光に照されなかつた、故に傲慢、邪淫、貪欲、厭制、慘酷など諸の悪事は、總て彼等に集まり、其國は是等諸の微菌の爲めに腐敗し、終に亡國の非運に到達せしめた、然れども民の死といふは、一人の人間の死と違ひ、左程に速かに来るものではありませぬ、一國一社會の民が死ぬほどに衰へるには、何百年なるや分らぬ、けれども遅かれ早かれ死んで仕舞といふことは疑ひない、シテ見ますると眞の開化とは、眞の道を知り、眞の道徳を守るといふことである、故に設ひ國は學問機械も開けず、陸海軍も學校も、國會もないとて、其人民が眞の道を知り、眞の道徳を守るならん、是は開化國なること疑ひない、然して眞の開化は眞の道徳に依て得られ

眞の道徳は眞の道即ち眞の宗教に依て得られるものであるから、無宗教なる民は、亡びに向つて歩むものでゐる、目わつて視ることを得るもの、智わつて考ふること出来る人よ、何うか先きに申した天下の規則を以て、深く鑑みねとならぬことではゐらんか。

サテ話が少し岐路に入りましたが、前に陳べたるキリスト降生前の歴史を見れば、世界各國は皆な希臘、羅馬の如き有様でありました、然るに耶蘇キリストが猶太國に降生して、眞の教が是等諸國に傳播するや、彼等を迷はしたる偽教は、朝日に解ける霜の如く、眞理の光に忽ち消へて其跡を絶ち、従つて野蠻なる風俗、習慣、法律、政治までもガラリと變つて、全く昔と反對になつた、昔しの人々は他人を憐むといふ心が少しもない、故に總ての慈善事業などいふことは夢想だもなかつた、然るに今は打

て變つて慈悲の心は深くなり、憐れな人間を救ふ爲めに、種々の慈善事業を企てるやうになりました。例へば貧窮なる病人を救ふ爲めには、慈惠病院を建て院費を以て治療する、又彼病人を看護する爲に、男女を論せず組を立て會を結び、其組合に入るもの若くは會員たるものは、無報酬で一生涯之に従事して居る、其他老ひて養ひなきもの、爲には養老院を建て、捨兒孤の爲には育兒院を設け、盲者啞者の爲には盲啞院を設け、様々の工夫を以て職業や學問を教へます、如斯感心な慈善事業は、西洋各國何處にも數へられないほど澤山あります、是皆天主教の博愛主義より出でたる結果である、天主教は他人を我如く愛すべしと教へる道じやから、之を信するものは自然他人を救ひ助けやうといふ奮發を起します、現今は日本にも右の種類のものを設けましたけれども維新以來西洋と交際するやうになつて後である、故に間接に天主教の感化を

受けたので与ります、然し未だ日本に於ては天主教信徒が結んだる如く、無給にして一生を慈善事業に委ねるといふやうな會は一つも見へませぬ、人々の最も嫌ふ所の、癩病人を救ふ爲めに建てたる慈善的の病院は、日本國內只一ヶ所である、是も天主教宣教師テストヴィード氏が、苦心經營の結果より漸く出來ました、即ち静岡縣下駿東郡富士岡村復生病院といふものは是である、教育は如何でありしか、基利斯督降生前には、大なる都會には盛んな學校もありました、けれども只貴人財産家などの子を教育する爲めでありました、貧窮なるものは教育も出來なかつたものであります、婦人に至りましては、男子よりも一層ひどかつた、婦人に教育するは學問を潰すといふやうな考じや、故に貴人までも婦人に學問はさせなかつたのです、基利斯督降生前は、世界其通りであります、現今でも支那、朝鮮、西藏などには、矢張女學校といふもの

は別にない、日本に於ては如何なる山間僻邑までも、公立の學校を設け、男女を論ぜず國民一般に教育を致します、又女子の爲めに女學校も立てられてある、然しながら是もキリストを信する國々と交際やうになつて後の事であります、之を以て見ますると、日本人はキリストを嫌ひ、又其教を信じませぬけれども、之より出でたる結果を採つて居るのである、其他又天主教の恩恵は、彼の奴隷にまで及びました、昔は埃及、希臘、羅馬などは、人民を自由あるものと自由なきものとの二種族に別けました、自由なきもの即ち奴隷でゐる、殊に羅馬には奴隷の數が夥かつた、羅馬人は其所有する奴隷の數に依て、財産の高下を定めた位でゐる、財産家と呼ばれる人は、一人一萬の奴隷を有して居つたといふ、實に驚いた話ではあらんか、ソウして是等の奴隷は、皆牛馬の如く市場に賣買するのです、哲學者カトン、シセロなどまで、此の野蠻なる風習

を別に怪まぬ、人の自由を奪ひ人間を牛馬の如く驅使といふことは、道理に背かぬと思ふて居りました、キリスト降生の頃に、羅馬府にある此憐むべき奴隷の數は、羅馬人に二三十倍あつたといふ、當時の世界は如何に殘酷如何に不義でありましたらう、然るに幸ひにキリストは降生せられ、其れ立てなされた天主教の感化で、漸々奴隷の數は減じ、三四百年の後には全く廢された、今十九世紀に於ても、亞非利加内地には未だ奴隷の賣買があります、然れども天主教の宣教師は、如何なる野蠻國までも入ります、入つた所には此野蠻なる風習は追々廢されつゝある、此奴隷廢止のこと丈けでも、キリストの感化は如何程世界に及んだか、世界は之を以て如何程變革したか分りでゐりませう、又キリスト降生後は、罪人を糺すの拷問は止められ、聞も恐ろしき磔刑の如きことは廢されました、又昔に於ては、女子は男子よりも劣るものじやと

思ふた、甚しきは女子は人間に非ずとまでいふ酷論を立てた學者もありました、埃及、希臘、羅馬の如く開けたる國でも、人々は女子は男子の奴隸、男子の玩弄物の如く視做た、羅馬の法律は、妻を生殺與奪の權利までも夫に與へた、世界中昔は其如くで、女子と小人は養ひ難しとか、外面女菩薩内心女伎女などいふ。男尊女卑の弊は甚しかつたのです、然るにキリストのお立てなされた天主教は、此弊風を一洗した、即ち聖書開闢の説に従へて、女子は男子の友でゐる、故に妻は夫の下に屬するものだけけれども、決して夫の奴隸でない、又救世主キリストは、聖マリアといふ童貞なる處女に依て生れた、故に救世主の恩を考へると同時に、其御母なる聖マリアの難有ことを考へる、聖マリアを尊敬する心は、自然に凡ての他の女子までに及びます、故にキリスト降生の後には女子を尊び助けるといふやうになりました、今日に於ても、正直に申せ

て、天主教を守る信者を除く外、女子を男子同様に尊ぶものはない、即ち天主教は夫婦の離縁は嚴禁するところである、若し離縁して他の女子を娶るものは姦淫するものであると教へる、然るに天主教を除くの外、離縁を禁ずるの宗教はない、其妻を換へると、恰も衣服を換へると同じ様に思ふて居る、日本などに於ても、所謂七去などいふことがありまして、些細な事故を以て妻を去ります、近き中實施されます日本民法(人事編八)には、七箇條の事故がなければ離縁は出来ぬ事になりましたから、日本流の無造作なる離縁は民法實施以來はありませぬ又商法には、女子も別財産を有つての權利を與へ、又夫の同意を得て、獨立して商業を營むことさへ出来る事となりましたから女子の地位も一段上りましたでゐります、然れども是皆西洋諸國の天主教より出でた法律を採つたので、ツマリ間接なる天主教の恩恵でゐる、又キリスト降生後は、戦争

の方法まで變りました。昔に於ては戦争して敗れた敵は、必ず殺されるか、或は奴隷に
 なるといふ習慣であつた、又敵國を奪ふた時など奴隷にすること出来ない婦女、幼童
 老人などは、悉く之を殺し、家屋は焼き、田島は潰し、樹木は截り、牛馬は奪ふなど
 慘酷至らぬ限ないといふ位で、一旦敗れた國は忽ちにして砂漠に變じて仕舞ます、ナ
 ント野蠻極まることではムらんか、天主教の感化は之にも及んだ、先づ戦ふものは兵
 である、故に人民を害することは一切禁止、又兵でも負傷者は最早戦闘力を失ふたも
 ので普通の人民と違はぬから、敵味方を論せず、治療もし介保もせねむならぬといふ
 やうになりました、之は西洋一般の規約にする積りで瑞西國シエネヴといふ都に集會
 し、一つの會を設けた、其時から其會に入る醫師看護夫は、腕に赤十字の徽章を着け
 て戦争の時には敵味方を論せず負傷者を治療する、又敵味方とも赤十字の徽章あるも

のは決して之を害しませぬ、之は即ち赤十字社である、キリスト降生より十八百七十
 七年後に、日本國も此赤十字社に入りました、故に日清戦争の時に、日本と支那とは
 雲泥の違ひであつた、日本人は敵國なる支那兵の負傷者でも、日本兵と同じやうに治
 療し介保した、之は支那人の案外に思ひ驚く所であります、如斯耶蘇キリストの教
 へられた、道德の感化に依て、世界の人情は一變し、總て憐み深くなりました、尙又
 最も感心なことには、天主教を信仰しない國々までも、天主教國と交際するやうにな
 れた、漸々キリストの教より出でたる良い結果が移ります、例へて日本國に於て、
 維新以來西洋諸國と交際しますから、キリストの教を守らずキリストを嫌ひますけれ
 ども、不知不識其感化を受けて、昔より傳つたる悪き習慣は追々改まりました、即ち
 舊幕の頃には、切腹は武士の常とし、拷問、梟首、磔刑、火炙などの如き慘刑があり

ました、斯やうな類の習慣は悉く無くなりました、如斯日本國は天主教國と交際すること、僅々二三十年の間で、基リス督の教より出でたる良い結果を得たことなか、澤山であります、却て千何百年の昔より、支那と交際を結んだる利益は何でありますか、先づ第一は學問としての漢學じや、然るに支那人は自國を華と稱し他は悉く東夷、南蠻、西戎、北狄と呼び、己れの國のみを尊んで外國を卑むといふのが漢學の主義、支那流の想像でゐる、又た漢學は昔を尊び今を卑しむといふ主義である、故に其弊や何でも外國のこと新しいことは一切之を輕蔑する、漢學は斯く昔を慕ひ、自國を尊ぶから、其結果として守舊主義鎖國主義を養成す、是れ却て開化の安善進歩の障礙なる學問ではゐらんか、其他桑蠶、織物、陶物などの如きものは多少の益はあつたに相違ない、けれども眞の學問、珍奇機械などの人智を進めるものを得る爲に、千何百

年間の交際は無益でありました、尙、眞の開化の基礎なる道徳は如何、只一つの儒道斗りじや、儒道は完全の道徳を教へましたか、孔子は名高い先生には相違ない、けれども其説く所は宗教でもなく學問でもなく、無學なものでも生れながら知る道徳でゐる、只甘く説いたといふ丈けじや、けれども缺點が多い、又誤謬もある、例へて妾を聚ることを禁せず、女子を卑み七去を説いた、又天を説いても明かでない、夫子の言性と天道とは得て聽くべからずといふた通り、神のことは少しも分らぬ、未だ生を知らず焉ぞ死を知んやといふた通り、死後のことは少しも教へぬ、されど道徳としての漢學、即ち儒道は宗教にもあらず眞の道徳でもありませぬ、千何百年の間儒道に教へられたることは、日本人が生れながら知る道徳で、大層な益は無つたのです、地球の運轉も知らず、日月星辰が神じやと思ふ妄信を破ることまでも出来なかつたのです

然らば文學としての漢學は如何、象形的の六ヶ敷文字、何萬といふ數多き文字を教へて、徒らに學問をする爲の道具にのみ力を費させる、爲に學問とは難澁の文字を讀み多數の文字を記憶するものじやといふやうな考へを、一般の人々に起させるやうになりました、斯やうな文學は決して益のあるものでなく、却て眞の文學の障碑になります、故に今日は漢字を廢止といふ論者もありません、是を以て見ると、キリストの教を信せざる支那國と交際して、多少の益もありましたが、害の方が多いいといふても良い、換言れを支那國と交際した爲に、千何百年の間貧血な國で眠ひつて計り居つた、然るに近年に至つて、俄かに血液の循環は激しくなり、目は忽ち醒めて、まるで復活したやうである、此の不思議なる大變革は、キリストの教を信する國々と交際を結むたからでゐる、故にキリストの教は、眞の開化に導き、却て他教は開化を妄げます、亞片

烟草が人を麻酔せる如く、人民を麻酔ます、然るに茲に私共の大に悲むことが一つあります、即ち日本國はキリストの教より出でた結果を採り、其原因なるキリストの教を捨てる、開化といふ花を折つた、けれども根を取らなかつた、間接なる利益を喜んで受けながら、直接の利益を蒙むることを嫌ふ、故に日本は未だ眞の開化に進んだとは云はれぬ、其表面が變革したのは、却て悲みの變革でゐる、何故なれを昔しは日本人皆悉く佛道神道を信じて居りましたが、今は却て日本國民の頭なる、社會上流の人々を始め、學校の教師田舎の隣者までも、幾分か學問のあるものは、何も信仰せず全く無宗教であります、幸ひに未だ日本國民の体ともいふべき、商人とか農人、又日本國民の足ともいふべき、車夫馬丁の如きものの中には、佛敎神道を信仰するものがある、けれども最早余程薄らいで來た、一般から云へを、從來の習慣に繋がれて居る

といふだけであります、今日の小學生徒が、他日國民たるの時代には、日本國は全く無宗教な國であらうと豫言することが出来ます。嗚呼羅馬の學者シセロが全く無宗教なる國は古今決して在ることなしといふた語は、其時の日本が開關以來始めて偽なることを證據するでありませう、外國と交際して物質的の開化をなし遂げたる日本國は、無宗教てふ實を結びだ、己れの生命を犠牲に供するまでに、日本國民を愛し、日本國民を眞正の開化に導きたいと望む所の吾々は、之を視て悲痛の涙を漲がざるを得ざる次第であります、日本國民よ、吾々天主教教師は、國をして眞の開化ならしむる眞理道徳、即ち造物主が一切人間を救はん爲に遣しなされたる救世主耶穌基督の恩恵、今世には行を正ふする道、來世には終なき幸福を與へる道を、爾に教へん爲めに、如何なる艱難をも厭はず日本國に渡りました、親愛なる父母兄弟親戚朋友を捨

て、忘れ難き故國を去り、骨を日本の墳墓に埋むる決心で渡りましたのも、之が爲であります、金儲どか、出世どか、若くは妻を娶り、一家を營いといふことまでも捨て、好んで癡人の如くなりましたのも、之が爲めであります、されども今日の状態を以て見れば、全く徒勞でなくとも、殆んど徒勞の如くである、日本國民よ、爾は耳わつて聽ざるか、キリストの救世主なる明證を、眼わつて視ざるか、キリストの世界に與へたる恩恵を、嗚呼爾若し耳ありども故意と懽者の如くし、眼ありども故意と盲目の如くするならん、吾々は汝等萬國に往き萬民に聽かせよ、聽いて信するものは救はるべし、信せざるものは救はれずと宣はれたる、キリストの金言に遵つて、力の限り及ぶ限りは聽かせんことを努めたから、最早吾々に責はない、然らば則ち其責果して誰に歸するであります。

眞理しんりの本源ほんげん第三篇だいさんぺん大尾

明治三十年五月十一日印刷
明治三十年五月十四日發行

定價金參錢

演說者 ドルワール、ド、レゼー
筆記者 林 壽 太 郎
甲府市太田町第九十五番戶

發行人 前 田 長 太
東京市京橋區築地新築町六丁目三十五番地

印刷人 河 本 龜 之 助
東京市京橋區築地貳丁目二十一番地

印刷所 國 光 社 印 刷 部
東京市京橋區築地貳丁目二十一番地





